

# JCAAW

Japan Commerce Association of Washington, D.C., Inc.

ワシントンDC日本商工会会報

1・2月合併号 2012年 No. 440

## 目次

- 大社会長からのご挨拶……………2
- 商工会年次総会・新年会のご報告……………3
- 商工会新年会:乾杯の前にちょっと一言  
幹事理事 米山伸郎……………6
- 新任理事のご挨拶……………8
- 商工会スキーの会のご報告……………10
- シリーズ～日本語教育の現状に迫る～「第四回」  
「コミュニティカレッジにおける日本語教育の実態」  
Northern Virginia Community College  
重久貴子……………11
- 「世界の医療最先端現場(NIH)からのメッセージ  
(その4)」NIH National Cancer Institute(NCI),  
武部直子……………14
- 「亜米利加剣道始末記 其の四」  
日本国大使館経済班 清水延彦……………18
- 「DCじゃ～なる-第6回」:袴田奈緒子……………20
- 「ワシントンおとめ Vol.5」……………23
- ワシントンの映画好きによるリレー連載:第6回  
「ワシントンで気ままに映画を語ろう」  
ぽっちみみ……………26
- ワシントン月報(第81回):服部健一……………30
- ワシントンソーシャルライフ:シゲコ ポーク…32
- 映画「My Week with Marilyn」:長野さわか…34
- 今月の書評「コンフィデンス・メン」:池原麻里子…36
- 連載小説「ワシントン・スクランブル」第1話  
愛川耀……………38
- 今月の簡単レシピ:木内由紀……………41
- English Rescue by Jennifer:  
「日本人が間違いやすい英語表現⑩」……………43
- 編集後記……………44

## 今月の特集

### 「新任理事のご挨拶」

新年度を迎え、商工会理事の交替がありました。新たに着任致しました4名の理事をご紹介します。P.8

### シリーズ—日本語教育の現状に迫る～第四回～

今月はNorthern Virginia Community Collegeで日本語教師をされている重久貴子様に、「ノバ大学」のご紹介とともに日本語教育の現状などをご執筆頂きました。P.11



### 「世界の医療最先端現場(NIH)からのメッセージ(その4)」

NIH日本人研究者によるリレー執筆コーナー。第四走者は前回に引き続き、NCIの「がん治療評価プログラム」で癌の研究をされている武部直子先生です。P.14



### 「亜米利加剣道始末記 其の四」

日本国大使館経済班・清水延彦様の亜米利加剣道始末記。今回が最終記となりました。参加されたセミナーやニューヨークのとある道場の稽古の様子など、ご執筆頂きました。P.18



## 新連載情報!

### 連載小説「ワシントン・スクランブル」

大好評を頂き完結した愛川耀の「ポトマックの煌めき」。今月からは中年男性を主人公にした連載第二弾がスタート!是非ともお楽しみ下さい。P.38

## 大辻会長からのご挨拶

会長 大辻 純夫

Senior Vice President

Toyota Motor North America, Inc.

### 「2012年を新たな出発の年に」



新年明けましておめでとうございます。

去る1月20日に商工会の総会が行われ、新しい4名の理事の方々が選ばれ、新しい体制下で私が2012年度も会長として務めさせていただくことになりました。また私ども2012年度の理事会は、女性陣が4名となり、新たな時代が到来したことを痛感いたします。この女性パワーを活かしつつ本年度の活動を積極的に進めていく所存ですので会員皆様の益々のご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

さて、昨年日本は東日本大震災に見舞われ、多くの犠牲者が出るとともにさまざまな産業に甚大な被害が発生しました。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。当ワシントン商工会といたしましても、商工会財団と共に震災直後から被災者支援のための義援金募集をさせていただきました。今回は、会員企業・個人のみならず幅広い方々からご寄付をいただきました。チャリティコンサートやバザーを行って得た汗の結晶のようなお金を寄付してくださった方々もいらっしゃいました。また米国人の方々にも多額のご寄付をいただき、日米の絆の強さを改めて感じることができました。そこで得られた約33万ドルは、日本赤十字および日本NPOセンターに寄付させていただきました。ご寄付いただきました皆様には、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

さて、新たな年2012年こそ日米両国が元気を取り戻す年になるよう祈念いたします。そしてそれに幾分かでも寄与できるよう、ワシントン商工会は微力を尽くしたいと考えております。また本年は会報やウェブサイトの充実、会員交流会の開催を通してこれまで以上に会員の方々との交流を深め、皆様のニーズに合ったイベントや事業を行うと共に、会員の皆様の積極的なご参画をお願いしたいと思います。

皮切りとしてまずは、恒例となりました新春祭りを1月29日の日曜日にワシントンプラザホテルにて開催いたしました。日本人のみならず多くの米国人の方々にお越しいただき、日本のお正月気分を存分に楽しんでいただけたと思います。ご参加いただいた方、また企画・準備・実施に携わっていただいた理事、ボランティアの方々にお礼を申し上げたいと思います。

今後さまざまなイベント、事業を通じて会員の皆様方とコミュニケーションを図って行きたいと思っておりますので、どんどんご意見をお寄せください([office@jcaw.org](mailto:office@jcaw.org))。

また皆様ご存知とは思いますが、今年は尾崎行雄東京市長がワシントンに桜を寄贈して百年目に当たります。毎年ほぼ東京と同時期に満開となるワシントンポトマック河畔の桜は、当地にお住まいの皆さんのみならず全米のアメリカ人の目と心を和ませるものだと思います。百年の節目を迎え、次の百年に向け日米友好の新たな種を蒔いていこうとの思いから、日本大使館、ニューヨーク日本商工会議所と共に寄付を募り、将来に亘って意義のあるプロジェクトに投資して行きます。

日米知的交流支援(米国の若手日本専門家による日米関係の将来ビジョン策定)および米国人学生向け日本語教育支援、百年前の桜が今なお存在するタイダルベイズでの景観整備や全米各都市での桜植樹など、過去を思い未来に育つ多彩なプロジェクトを推進していきます。商工会関係者一同、一生懸命努力をしておりますので、今後とも皆様方のお力添えをいただきますようお願い申し上げます。(こうしたプロジェクトを遂行していくために皆様の資金のご支援やボランティアを募集させていただいております。詳しくは、先述の商工会ホームページ(<http://jcaw.org>)をご覧ください。)

最後になりましたが、皆様方のご繁栄とご健勝を心から祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

## 商工会年次総会・新年会のご報告

1月20日、2012年度商工会年次総会が、Fairmont Hotelにて開催されました。当日は個人会員3名、法人会員23社にご出席いただき、事前に提出いただいた委任状の有効票123票と合わせて192票となり、規定の定足数136票を越えて総会は有効に成立いたしました。

米山理事(幹事)の司会進行で始まり、冒頭、通常の活動報告に先立ち、大出理事(特命担当)より①震災義捐金募集活動の結果報告、②桜100周年記念事業の中間報告がありました。特に、桜100周年記念事業については、その柱である、㊦日米知的交流事業、㊧日本語教育支援、㊨タイダル・ベイスン景観整備事業、㊩全米桜植樹プロジェクト、㊪文化交流事業のそれぞれの進捗状況等について報告がなされました。

続いて以下の各議案について提案、報告がなされました。

1. 2011年度運営報告:大辻会長から地域協力、会員、広報、研修、企画行事、スポーツの各分野の活動成果について詳細な報告がなされるとともに、2011年度の反省を踏まえた2012年度への課題についても説明がありました。
2. 2011年度会計報告:野田財務担当理事から2011年度の会計報告がなされ、全会一致で承認いただきました。
3. 2012年度理事選出:通算3年の任期を終えて、吉村理事、園田理事、市川理事、大出理事の退任が報告されました。退任理事の皆様たいへんお疲れ様でした。2012年度は曾良道治氏、寺澤英光氏、ボーク重子氏、ベネフィールド・ステファニー氏の4名が新理事として承認されました。更に、2011年度総会以降に理事会推薦で理事に就任した野田理事、吉川理事、向井理事、田中理事についても、改めてご承認いただきました。



新閣僚?

今回の理事選出は、たいへん喜ばしいことに、自ら立候補いただいた方2名の方が理事に選出されるとともに、女性2名が新たに加わって理事会全体で4名の女性が理事を務めることとなり、ダイバーシティの観点からも大いに歓迎すべき結果となりました。

約10分間の休憩の後、総会の後半の部がスタートしました。



新メンバーによる理事会の様子

休憩時間中、新しい理事メンバーによる臨時の理事会が開催され、新体制・担当が決められました。

新会長、新幹事には大辻氏、米山氏がそれぞれ再任され、各理事の担当が紹介されて、後半の総会が進められました。

### 1. 2012年度運営方針:

大辻会長から、昨年度に引き続き、「会員の期待に応える商工会活動」を推進するため、会員の皆様のご意見を積極的に聞かせていただくとともに、「全員参加型商工会」とすべく、イベントの企画、準備、実施にも積極的に参加いただきたい旨の運営方針が述べられました。

### 2. 2012年度の予算:

野田財務担当理事から、2012年度予算について、収支均衡の基本方針で予算を組んでいるとの説明があり、承認をいただきました。

### 3. 質疑応答

会員の菊池様から、震災義捐金募集を継続すべきではないかというご提案と、桜100周年記念事業のうちタイダル・ベイスン整備の内容についてご質問があり、大出前理事より、義捐金募集については一巡した感があるとともに、桜100周年記念事業の方に注力するため一旦休止としたい旨の説明がありました。また、タイダル・ベイスン整備の考え方、検討中の案について説明がなされました。

以上、2012年度商工会年次総会を、ほぼ定刻の11時30分に終えました。

年次総会に引き続き、正午より恒例の新年会が、同じくFairmont HotelのColonnade Roomにて開催されました。昨年を超える、120名のご来賓および商工会会員が参加する、盛大な会となりました。開場後、さっそく、本日のご講演者でいらっしゃる国務省東アジア・太平洋局のマーク・ナッパ―日本部長を取り囲んで、懇親の輪が広がっておりました。



開場直後、さっそく懇親を深める皆様

12時半からは、着席し、ランチを頂きながらの会となりました。

まず、大辻会長から、震災義捐金募集への幅広いご協力に対する感謝の気持ちが示されました。また、新たな2012年こそ日米両国が元気を取り戻す年になるよう祈念しており、ワシントン商工

会がそれに対して貢献できるように微力を尽くしたい。何より桜100周年記念事業の成功に向けて最大限努力していきたいとの抱負を述べられました。

大辻会長に続き、藤崎一郎特命全権大使からご挨拶を賜りました。大使からは、今年の日米関係のキーワードとして、POST(①野田首相(prime minister)の訪米 ②沖縄基地問題 ③さくら植樹100周年記念事業 ④TPP)をご紹介いただきました。さくら100周年については、ワシントン・ポスト紙にご寄稿されたとのことで、別の機会にまた詳しくご紹介いただけたとのことでした。



ご歓談中。左より、大辻会長、藤崎大使、ナッパ―日本部長

続いて、司会の瀧澤理事から、本年度の各理事の担当業務のご紹介があった後、米山幹事による乾杯のご発声後、おいしい魚料理の昼食をはさみ、マーク・ナッパ―日本部長によるご講演をいただきました。

ナッパ―氏は、2回目の日本語でのご講演ということで、初回である20年前の大学3年生時のときは、日本語スピーチ大会で見事3位になられたとご紹介がありました。拍手がなりやんだのち、実は参加者が3名であったと明かされ、会場は笑いの渦に包まれました。その後、日米関係は、お互いの強い信頼に基づく特別な関係であり、地政学的にも経済的にも世界中に様々な困難がある今こそ、さらにその関係を強固なものにしていくべきとのお話をいただきました。また、会場からの質問に応え、日本のTPP議論への参加を歓迎しているが、日本国内にもさまざまな議論があることは承知しており、最終的には、日本自身が判断することと理解しているとお話がありました。現在のオバマ政権を知る貴重な機会であり、参加者一同、大変熱心に耳を傾けると同時に、ナッパ―日本部長の完璧な日本語に、感嘆する声が漏れ聞こえました。



会場を笑いの渦とし、にんまりのナッパ―日本部長

ご来賓の皆様、会員の皆様、当日の運営をご支援くださった皆様、どうもありがとうございました。また来年、お会いできることを事務局一同大変楽しみにしております。(完)

## 商工会新年会：乾杯の前にちょっと一言

幹事理事 米山 伸郎  
三井物産ワシントン事務所長

1月20日(金)の商工会新年会で、商工会幹事の米山三井物産ワシントン事務所長が乾杯の音頭を取ることにになり、演壇に上がられました。

皆直ぐに乾杯になると思い手に手にグラスを持ち上げましたが、意外にも米山幹事より桜寄贈100周年に因んで米人に対する日本語教育と日米知的交流に関する次のスピーチがありました。

商工会が活動を行う趣旨と覚悟のほどが良く纏まれていると思いましたので、ご本人了解の上会員の皆様にご紹介したいと思います。(広報担当幹事)

.....

ワシントン商工会幹事の米山と申します。いつも大変お世話になっております。わたくしの本業は三井物産のワシントン事務所長をしております。昨年来、桜100周年事業で本業並みに忙しくしておりますが、100年に一度というめったにない事業に参加できて光栄に思っておりますし、ラッキーと感じております。

ワシントン商工会の活動は100年とは比べ物になりませんが、1988年の正式な発足以来、来年で25年、四半世紀を迎えます。1988年頃といいますと、日米貿易摩擦やジャパンバッシングなどという言葉も飛び交い、商工会会員企業の皆様も「日本企業」というよりは「アメリカの企業」になりきり、地元を根を張り、地元へ貢献することに努力されていた頃であったかと思えます。

それから二十数年が過ぎ、いまや皆様ご承知の「グローバル化」の時代となり、ヒトモノカネ情報がクロスボーダーで自由に魅力のある市場や魅力のある会社に流れ込む時代となりました。

自分の会社のことで恐縮ですが、当社でも現在、「グローバル人材」とはどういった人間であるべきか、グローバル企業となるにはどのような魅力、どのような強みを持てばいいのか、といった禅問答が社内で繰り返されています。

迷ったときには先人の知恵に習え、ということで当社の創業者や先人のステートメントなどを調べますと、“日本で生まれ、世界で育つ”といったフレーズが出てきます。やはり、グローバル化が進めば進むほど、会社のアイデンティティとしての“日本”とその“DNA”の持つ重要性が増す気がします。外国人から見て、「日本の会社と組めばこんなメリットがある」、「日本と組めばこんないいことがある」、「日本に行けば面白いビジネスのネタがある」、といった「日本」というものに対する期待感、いわばブランド価値が大切になる気がします。

残念ながらワシントンで活動をしていて感じますのは、以前に比べて「日本」のイメージが必ずしもポジティブには語られていない点です。先週も、シンクタンクでのセッションで、「日本の少子高齢化と社会保障費の増大はサステナブルではない」とか、「日本の財政赤字の状態はサステナブルではない」などといわれたりしていました。私に言わせれば、日本は世界有数のサステナブルな社会であり、であればこそ世界の長寿を誇っていると思えます。また、企業の立場からしても、日本には100年どころか200年以上永続している企業が3千社以上あるといわれており、世界第二位のドイツが700社程度とのことで、圧倒的なトップにあるわけです。これなども、日本のビジ

ネス環境や文化がサステナブルであればこそその話です。さらには、不幸にして昨年の東日本大震災で明らかになったことですが、世界の重要な部品のサプライチェーンのサステナビリティを支えているのは日本の中小企業であるわけです。

こういった日本の素晴らしいところを含め、我々日本人自身が「日本の強み」をDNA分析し、理解し、自信を持って外に情報発信していくことが日本のポジティブブランディングにとって大切ではないかと感じます。さらには、ワシントンにいる人々、あるいは全米のアメリカ人、そして世界の人々に一人でも多く日本に興味を持ってもらい、日本に行っていただき、日本で仕事をしてもらい、そこでそういった「日本の強み」を感じてもらい、母国語で情報発信してもらうことで日本ブランドの世界の認知も少しずつ上がるのではと思います。

ワシントン商工会ではそういった思いも込めて、桜寄贈100周年事業の中に「日本語教育支援事業」を設けています。①子供を中心に不特定多数のアメリカ人に日本語や日本文化に興味を持ってもらうテントをストリートフェスティバルで展示したり、②既に日本語学習を行っている地元の小中高の先生を財政的に支援したり、③日米協会のジャパンボールに参加した高校生の同窓会的ネットワークを支援したり、あるいは、④大学に入っても日本語学習を継続してきた学生が社会でそのスキルを活かせる場としての日本企業就職を1つの目標として、日本企業人事担当との情報共有とネットワークの場を提供する<sup>1</sup>といった事業内容です。日本企業の人事組織にとって、日本人社員に英語をしゃべらせるだけがグローバル化ではなく、むしろ日本語を話せるアメリカ人を採用するほうが手っ取り早いケースもあるわけです。

さらには、「日本」を職業の題材に位置付けたシンクタンクなどの日本研究員の研究を支援し、日米関係の長期戦略を検討してもらう「知的交流事業」をこの日本語教育支援事業の延長線上に位置づけています。

ということで、皆様におかれましてもこれらの事業への財政的ご支援はもとより、直接ご参加いただき、盛り上げていただければ幸いです。

それでは、本日までご列席の皆様のいやさかと桜100周年事業の成功、日米関係のさらなる発展、そして日本のポジティブブランディングの進展を祈念して乾杯したいと思います。乾杯！

---

1 4月7日(土)にワシントンコンベンションセンターにてセミナー形式で開催予定。

## ワシントン日本商工会 新任理事のご挨拶

新任理事メンバーのご紹介を致します。2012年度の理事会は引き続き大辻会長を筆頭に、女性陣が4名となり、新たな時代が到来したことを痛感いたします。この女性パワーを活かしつつ本年度の活動を積極的に進めていく所存ですので会員皆様の益々のご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。



**総務** 曾良道治(2012年1月～)

Michiharu Katsura

Senior Vice President & General Manager,  
Sojitz Corporation, Washington Office

この度、総務理事に就任しました曾良道治(かつらみちはる)です。双日米国株式会社ワシントン支店に勤務しています。

ワシントンに2010年5月に着任しました。ワシントンは2度目の駐在で、前回は1986年から1991年まで勤務し、「Japan as No.1」の時代の恩恵と日米貿易摩擦の逆風を政治の地ワシントンで肌身に感じながら仕事をしていた。

ました。

2011年は、遂に日本の貿易収支が赤字に転落しました。経常収支が黒字ですので、未だ健全性は残っていると言えますが、前回の駐在時代と較べると隔世の感があります。日本をめぐる議論も落ち着いた論調ですし、日本の社会の成熟社会に入ってきていますので、日米の成熟社会同士がどの様な新たな関係を作っていけばよいのか考えながらJCAWの仕事をしていきたいと思っています。

今後の社会福祉問題の元凶と批判されている感のある団塊の世代です。女房からは、「気が利かない」「レディファーストが身に付かない」と常々言われていますので、言動に失礼の段がありましたらお許し下さい。ワシントンの町や人々が大好きですので、宜しくお付き合い下さい。



**研修** 寺澤 英光(2012年1月～)

Hidemitsu (Terry) Terasawa

Chief Representative

The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd.  
Washington, D.C. Representative Office

この度、研修担当理事を拝命しました、寺澤です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

昨年3月に英国ロンドンより当地に赴任致しました。米国在勤は1989～92年、2006～09年に続き三回目となりますが、三度ともNYジャイアンツがスーパー・ボールを制したのが密かな自慢です(1991年、2008年、2012年)。

2012年は桜寄贈100周年だけでなく、小職の生まれた1964年以来となるIMF/世銀総会が再び東京で開催されるなど、とてもメモリアルな年となります。

この記念すべき年にワシントンで勤務できる幸せをかみ締めつつ、研修を通じて、当地での日米関係の向上に全力を尽くす所存です。皆さまからのご指導をお願い致します。





**企画行事** ボーク重子(2012年1月～)  
Shigeko Bork,  
President Shigeko Bork mu project

今年1月より商工会理事となり企画行事を担当する事になりました。結婚を期にワシントンDCに住んで今年で15年になります。本業の現代アートコンサルティングに加え、昨年よりハッピーなアメリカ生活の成功を約束するサイト [askshigeko.com](http://askshigeko.com) をスタートしました。少しでも日米文化交流に貢献出来ればと思っております。

仕事柄イベントは企画も参加することも多く、今までにワシントンバレエ団、アジアソサエティー、ウィメンズアート美術館、アート団体トランスフォーマーなどで様々なガラチャエアーを努めさせて頂きました。これらの経験をもとに、商工会のために企画行事で少しでもお役にたてれば幸いです。

～受賞歴～

2006年雑誌ワシントンアンが選ぶ「25 Beautiful People」にワシントンポスト紙のBen Bradlee氏、President Barack Obama氏(当時上院議員)と一緒に選出されました。

どうぞ宜しくお願い致します。



**特命理事** ベネフィールド ステファニー(2012年1月～)  
Stephanie Benefield  
Benefield Ltd.

In 1972, my father was assigned to the US Embassy, Tokyo, and our entire family moved to Japan. I didn't expect to stay in Japan for any length of time, but I started attending International Christian University (ICU) and ended up staying until I completed my undergraduate work.

When I returned to Washington for graduate school at SAIS, I was given the opportunity to work at Nihon Keizai Shimbun, where I collected information on State Department and the Congress. The reporters even helped me with my homework.

It was my intention to go back to Japan after graduating, so I joined the State Department and was assigned to the US Embassy, Tokyo as an Economic Officer, beginning at the end of 1979 and completing my assignment in January 1985. During that time, I wondered "Why are American companies having such a difficult time making successful businesses with Japanese companies?"

After returning to Washington, I went to work for a large computer company, Electronic Data Systems (EDS), which was trying to break into the Japanese telecommunications market. One day, I received a call from a Japanese friend working for the Japan Defense Agency (JDA) on the FSX co-production agreement. He was having difficulty explaining to the American side what the Japanese side could do, so he introduced me to a few people related to the project and suggested I start giving them advice about how to negotiate. This situation led me to begin an independent management consulting business focused on supporting the creation of new businesses for Japanese and American companies in both countries over the past twenty years.

I joined JCAW in 1989 when it was much smaller in size than it is today, but I have always enjoyed the opportunity it has given me to meet many friends in the Japanese-American community.

I look forward to supporting JCAW on the Cherry Blossom Festival, as well as many other projects in future.

## ワシントン日本商工会スキーの会ご報告

企画スポーツ理事 向井 健太郎

商工会スキーの会を2月5日(日)にペンシルバニア州、Whitetail Resort (<http://www.skiwhitetail.com/>)で開催致しました。

ちょうど一週間前の週末にはDC近郊が17℃近くまで気温が上昇し、スキー場も10℃近い温度で、悪天候が予想されキャンセルが大勢続出致しましたが、それでも前回は上回る総勢49名による参加となりました。大人25名、子供24名という構成で、非常に多くのお子さん達にご参加戴きました。

当日の気温は朝が1℃で降雪があり、道中には軽い吹雪に見舞われ、これは現地に辿り着けるのかと心配をした程でした。ここに来て新雪か！という絶好のスキー日和という感じでありましたが、雪山のコンディションは上級者にとっては少々物足りない状態だったようです。何名かの上級者達は自らの滑りに没頭するのを断念され、多くのスキーヤー達をアシストして下さいました。また、スーパーボールの日で普段よりもスキー場が空いていたのは子供達や初心者達には良かったようでした。多くのお子さん達が大変喜んでおり、小さなスキーファン達が多く誕生した日でありました。

今回の催行会社でインストラクターも務めて下さったIdeaTravelの藤山さん (<http://www.ideatravel.biz/about.html>)によるレッスンも大盛況で13名が参加しました。スキーヤーを増やす事にも情熱を注がれておられる藤山さんはスキーシーズンには何度かスキーツアーを催行されておられますので、シーズン到来の際には予定を確認して戴くと皆様のDCでのスキーライフもより充実するかと存じます。

最後になりますが、商工会ではスキーに続き今年もゴルフ・ソフトボール・テニスの企画を計画しておりますので、多くの方々の御参加を心からお待ちしております。



スキー教室



記念撮影

## シリーズ～日本語教育の現状に迫る～「第四回」

### 「コミュニティカレッジにおける日本語教育の実態」

Northern Virginia Community College  
Assistant Professor, Japanese Program 重久 貴子

「先生、ちょっと、質問があるんですけど」「この間、日本人の人と話す機会があって、自己紹介をしている時、ちょっと気になったことがあって」「実は、『仕事はなんですか』と聞かれたので、学生だと言いたかった時に『私は学生です』と言うのか『私が学生です』と言ったほうがいいのか、ちょっと迷ってしまいました」「あ、それからその人に、仕事の場所を聞こうと思った時に『お仕事はワシントンですか？』というのか『お仕事がワシントンですか？』というのかわからなくなってしまって...」

ああ、又、助詞の「**はとが**」の質問ですか。先週の授業で習ったばかりだからやっぱりまだ、わかりにくいんですねえ。

アメリカで日本語教師として仕事を始めてからは学生とこんな会話ではじまる毎日ですが、インディアナ、コネチカット州での教職の後、ノーザンバージニアコミュニティカレッジ(以下、ノバ大学と省略)で教え始めて今年で六年目になります。

ー「コミュニティカレッジ」ってどんな所ですか。

日本でいうと、短期大学(四年大学編入のための授業)と専門学校(専門教育や職業訓練のための授業)と市民大学(生涯教育のための授業)が一緒になったようなところだと考えていただければわかりやすいかと思いますが、学生の年齢も高校卒業したばかりの子から定年退職した方などかなり幅があります。一般の四年大学の様な入学選考が全くなく高校卒業者であれば、誰でも入れるというシステムなので、同じクラスの中に学力や能力、人生経験やバックグラウンドなどが随分違った学生達がいると言うのも面白いところだと思います。

それから、年間の授業料が、州立大学の八千二百四十四ドル、私立大学の二万八千五百ドル(全米での授業料の平均-カレッジボード参照)に比べて、平均、二千九百六十三ドルと、比較的安いというのも特色の一つだと思います。

授業のスケジュール等も社会人にも便利な様に、夜間のクラスや土曜日のクラスも開講されています。私の教えているキャンパスはアレキサンドリアにありますが、外国語(アラビア語からベトナム語まで13カ国語開講されています)のクラスは大抵週二回、一日、二時間半(因みに四年大学での外国語の授業は週に五日、月曜日から金曜日まで45分から50分というのが通常です)のスケジュールです。ノバ大学で始めて教えた年は夜の七時半から九時五十分までの授業があってとまどいしましたが、一日仕事を終えた後で疲れているはずなのにヤル気一杯の学生の姿に驚いたのも今はなつかしい思い出です。



ノバ大学には、全部で6つのキャンパス(アレキサンドリア、アナンデル、ラウドン、ウッドブリッジ、マナサス、スプリングフィールド)があり学生七万人(その内、フルタイムの学生が三万三千人程—2010年ノバ大学統計参照)が登録しています。最近のトレンドとしては、オンラインで単位を取得したいという学生の需要に応じて、授業がインターネットで参加できるというプログラムの増加があげられます。それから、学生の卒業時の成績が良ければバージニアにあるほとんどの四年大学への編入が自動的にできるというシステムも導入できているので、経済的に恵まれない優秀な学生が編入を目的に勉強しているというケースが多くなっているようです。

実は副大統領の奥さんのジルバイダンさんがノバ大学の英語の教授の一人だということもあり、オバマ大統領のキャンパス訪問が既に二回程ありました。去年は、第一回目の『コミュニティカレッジサミット』がホワイトハウスで開かれたりして、最近はマスコミなどでコミュニティカレッジの重要さが指摘されることが多くなりました。

#### —「ノバ大学」の日本語教育の状況は？

最近、他の高校や大学関係の先生方から「中国語やアラビア語の勢いに押されて、日本語を取りたい学生数が減っている」と言うようなことをよくききますが、ノバ大学での日本語の学生数は一クラス25人で、四クラスとして毎学期約100人程の希望者がいます。常勤の私と他に二人の非常勤の先生方と一緒に一年生(101と102)と二年生(201と202)のクラスを開講しております。みなさんによく驚かれるのは、ノバ大学の外国語のプログラムの中で、日本語の学生数がスペイン語の次に大きいということです。今春からはもう一人の非常勤の先生にきていただいて101のクラスを二クラス、アナンデルキャンパスで追加する予定です。

二、三年前からは、インターネットでとれる日本語のクラス(現在のところ101だけですが、2012年の夏からは102もとれるようになります)も開講しております。今学期からノバ大学とバージニア州の他のコミュニティカレッジ間の継体プログラムが始まり、参加校の学生は自分の大学の単位と同じように、ノバ大学の授業を受講できるということになりました。現在、私のオンラインのクラスにはノバ大学に加えて他の四校からの学生が参加しています。


#### —「ノバ大学」の日本語教育の今後の課題とは？

最近、授業のカリキュラムを見直ししているうちに何か足りないなあと感じるようになったのは、学生が実際に学習した言葉を生かせる場、特に地域の日本人の方々との繋がりの機会が少ないということです。全米外国語協会(ACTFL-American Council on the Teaching of Foreign Languages)が、外国語学習が必ずカバーしなくてはいけないスタンダードとして五つの基準(Culture, Communication, Connections, Comparisons, Communities)をあげているのですが、最後の「コミュニティ」の要素をどうやって、カリキュラムに盛り込むかということが現在の大きな課題です。

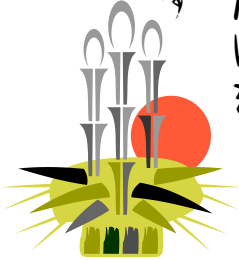
今学期からテストケースとして始めてみているのは、バージニアに住んでいらっしゃる日本人の方に二人か三人の学生のグループとペアになっていただき、スカイプを使って、会話の練習(英語と日本語の会話交換)をするというプロジェクトです。その他にも、ビデオを使ったブログでの情報交換や、日本語を使ったコミュニティサービスや日本の企業の方々にお問い合わせのレクチャーシリーズ、インターンシップの可能性?などと、アイデアはいろいろでてくるのですが、時間もお金もないといいはる学生達が相手なので現実化が思うようにいかないのが現状です。でも、やっぱりやる気のある学生をみていると何かしたいと思ってしまうのは職業病なんではないでしょうか。

今回、ワシントン日本商工会が、2012年の桜植樹100年記念行事の一つとしての日本語強化事業のプロジェクトを立ち上げられたというお話をうかがい、非常に心強く思っております。私事で恐縮ですが、学会などで「日本語教師のためのテクノロジー」等のワークショップを通じてワシントンの近郊の小学、中学、高校、大学等の日本語の先生方との交流を深めてきましたが、2012年は商工会の方々とは何かダイナミックな活動ができるのではないかと楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。もし、ノバ大学や、プロジェクト参加等、ご質問、ご意見等がございましたらお気軽にこちらの方までご連絡下さい。

Takako Shigehisa  
 Assistant Professor, Japanese Program  
 Assistant Dean, World Languages  
 Alexandria Campus  
 Northern Virginia Community College  
 703-933-3971  
<http://www.nvcc.edu/home/tshigehisa>



明けましておめでとうございます  
 昨年中は大変お世話になりました  
 誠にありがとうございます  
 本年も引き続き JCAW を  
 よろしくお願い致します



## イラスト募集

お子様の素敵な絵を載せてみませんか？  
 詳細はJCAW事務局  
[office@jcaw.org](mailto:office@jcaw.org)まで  
 お尋ね下さい。  
 奮ってのご公募お待ちしております。

## 「世界の医療最先端現場(NIH)からのメッセージ(その4)」

NIH National Cancer Institute (NCI), Division of Cancer Treatment and Diagnosis,  
Cancer Therapy Evaluation Program (CTEP), Investigational Drug Branch,  
Senior Investigator 武部直子

今回のNIH特集連載の号は、NCIより二人目の執筆者となります。前回はIntramural Programでご活躍中の小林久隆先生の研究室でのお仕事にフォーカスが当てられておりました。今回は日本ではあまりよく知られていないNCIのExtramural Programにある重要な部門の話をしたと思います。予算的にはNCIの総予算のうちIntramuralが10-15%に比べExtramuralが85-90%を占めているにもかかわらず、日本ではあまりその存在が知られておりません。その主な理由としては、このセクションに相当する機関、もしくはこれに類似した機能をもつ部門が日本の国立がんセンターなどに存在しないからだと考えられます。Extramural Programにはいわゆる「グラント」と言われる大学研究者が応募する研究申請書を審査するプログラムのほかNCIの研究者が統括する様々ながん研究プログラムも含まれております。



私の所属する「Cancer Therapy Evaluation Program(通称CTEP)がん治療評価プログラム」はこのExtramural Programの一つであり、NCIにおける「Division of Cancer Treatment and Diagnosisがん治療及び診断部門」の中にある最大のプログラムです。現在アクティブな臨床プロトコールは1,000あまり、そのうち臨床早期のプロトコールは174あります。CTEPには私を含め米国医師ライセンス及び腫瘍学(オンコロジスト)や血液学(ヘマトロジスト)の専門医資格を持つ内科、外科、小児科医などの医師でありかつ研究者であるSenior Investigatorといわれる役職に就く者が20人弱おり、その他の専門性を持つ薬学博士やPhDを含め総勢200人以上のスタッフで機能しているプログラムです。Extramural Programの特殊性は各大学、研究施設、あるいは企業の研究者と共同しながらプロジェクトを進めるという機能を持ち合わせているため、抗がん剤開発など製薬会社やバイオテクカンパニー、そして多施設と共同臨床試験などを行う必要性のある研究を実行するには最適のプログラムです。逆に抗がん剤開発プロジェクトは産官学連携がなくては実施不可能なプロジェクトでもあります。CTEPを例にとりますと、私を含めた医師・研究者の立場にあるSenior Investigatorの統括下に産官学コラボレーションのプログラムが生まれ、研究者達は各プロジェクト開発の司令塔を担いがん治療薬の実用化にむけた研究を行います。連携をスムーズに行うべく各パートナーが契約書を取り交わし、その合意の下で産官学共同体が一丸となってがん治療の研究、臨床をリードしています。この合意書は法律用語が使用された「共同研究開発契約書」といわれるもので、研究内容はもちろんのこと共同研究の結果生じた知的財産権に関して各パーティーはどのような権利を持つのが明確に記されており、十分内容を検討議論の末、契約を取り交わすこととなります。日本では産官の連携がエレクトロニクスや産業の部門では盛んに行われておりますが、不思議なことに医療関係、とくに製薬会社と官の連携は希薄です。日本は米国と異なり明治から国が最高学府を設立支援してきましたから、官学連携は伝統的に受け入れられているようですが、日本の医療医学関係ではここに「産」が入ることになぜか大きなレジスタンスが存在するようです。物理的というよりもメンタル的な壁、それは日本には従来から医療医学を行うものは利益追求をしては憚られるというような風潮によるものかもしれません。産官学連携を日本の医療医学界でも導入することは今後の重要な課題だとも思います。米国が依然としてがん治療部門において世界をリードし続けている要因にCTEPの存在がその一つ

として数えられるかもしれません。国から全面的な予算支援を受け、NCIおよびCTEPが支える臨床試験の全国ネットワークを駆使し、産学のコラボレーションをリードすることによってがん治療の実用化にむけてのプロジェクトを実現化させる指南役をCTEPが請け負っていることに相違ありません。

では、もうすこし詳しく私の仕事についてご説明いたします。小林先生が投稿された“NIHからのメッセージ第3回”には、米国政府がNCI創立に至る歴史的経過が詳しく説明されています。1971年ニクソン大統領による一般教書演説で「がんの治療法を発見するための集中キャンペーン」の提唱による米国の国家がん法が制定されたことに伴い、私の所属するCTEPが誕生しました。当時はがん



に使う薬の数も少なく、いわゆる一般的に化学療法といわれるものが中心で、この種の薬はがん細胞だけでなく正常細胞、特に骨髄にある血液を造る機能や免疫機能を担う細胞も同時に殺してしまうというタイプの薬です。また当時は薬の種類も限られており、現在頻繁に使用されている分子標的薬(イレッサをはじめラパチニブやグリーベックなど)や抗体薬(ハーセプチンやリトキサンなど)はまったく存在しませんでした。その頃NCIでは新しい抗がん剤の開発が活発に行われていました。当時から、抗がん剤は抗生物質などの他の薬に比べ、開発は非常に困難といわれ製薬業からも避けられていました。その理由の一つに、がんと言っても各臓器特有のがんによって薬の効き方が異なり、時には毒性まで異なるという厄介な面があって、薬効を試験する際にそれぞれのがん種に対して独立した試験を行わなければなりません。例えば乳がん、大腸がん、肺がんなど頻度の高いものからアメリカ国内で年間何百例という稀ながんまで多種多様であること、その結果、ある抗がん剤の有効性を調べるためには、各がん種に対して、がん細胞レベルの試験にはじまり、動物実験モデルを使用することにより薬の安全性及び有効性を判断し、その結果ヒトに対して使用できるか否かを判断します。そしていよいよヒトでの臨床試験がはじまり、まずは安全性を第一に、続いて臨床的効果を判断しなければならないのです。この様に一筋縄ではいかない薬剤開発は、一つの薬を生み出すのに何千億単位の莫大なコストがかかり、やっと臨床試験までこぎつけたとしてもそこから最後まで生き残り、国の承認を得ることができる確率は10%以下といわれています。すなわち抗がん剤製薬のビジネスは民間の企業にとって魅力的ではなかった歴史があります。製薬会社が開発を行わなければ、がん患者さんの治療に有効な薬が開発されず、つまりは国民の健康が危ぶまれるということで、国家的政策としてNCIが創薬を引き続き行う道、加えて製薬会社、また大学の研究者とのコラボレーションができるようなシステムを開発し、開発困難な開発途上にある薬の開発を国の税金を使って請け負うことにしたのです。企業と政府機関共同で抗がん剤を開発しFDA(Food and Drug Administration)による新薬の承認を獲得すると、その後は製薬会社が薬を市場に出すことができ、ようやく国民に還元できるようになります。NCIは大手製薬会社だけではなく、バイオテックカンパニーや大学の研究者によってはじめられた抗がん剤開発に関しても将来性があるとNCIが判断したものに対して、実際にNCIに化合物を持ってきて臨床試験に使える薬の開発を行ったり、あるいは化合物の生成及び開発に必要なプロセスをすべてNCIで担当したりいたします。ここで強調したいのはNCIが単なる研究資金を投資するのではなく、自身の施設設備と人材を投じることにより共同開発を行うということです。この様に民間と共同で開発しFDA承認に至り現在も抗がん剤として使用されている薬は過去10年間に10種以上存在します。

このような高額、長期にわたる抗がん剤開発の全過程の中で最も開発費が高い過程は、ヒトを対象とした臨床試験です。臨床試験とは現在受けることの可能なスタンダードな治療はすべて受けたのにもかかわらず、がんの再発、状態が改善されないといった患者さんに対して、試験の同意をいただいはじめて適応される実験的医学のことを意味します。臨床で使うことの許された新規化合物や新し

い治療法を国際的に認められた基準を満たす医療施設において、臨床試験のルールにのっとり、一人ひとり丹念に薬の効果、副作用をフォローし治療を行い、そのデータを解析して薬の有効性、安全性を判断します。新規化合物をどのように投与するかなどの詳しい記載は臨床試験プロトコルにすべて明確に記されていなければならない、またプロトコルはIRBといわれる専門家ならびに患者さんの代表なども加わった会議にかけられ、倫理的、科学的、統計的にいろいろな角度から審査されたのち、初めて使用可能になる治療指針を示した文書です。第1相試験とよばれる少人数の患者さんから安全性を確かめる試験をまず行い、次に安全性はもちろんのこと薬の効果を調べるための第2相試験、さらには生存期間が改善するかどうかを確認するための第3相試験を行うのが一般的です。最終段階に行う第3相臨床試験は、同じような臨床経過を有する同種の悪性腫瘍の患者さんを何千人分集め、スタンダードな治療と新しい治療の比較を行い、生存期間の差を統計学的解析により比較分析する試験です。製薬会社は、薬開発にかかった費用を回収し利益を上げるために、頻度の高い悪性腫瘍にフォーカスを絞ります。そのため、ほとんどの場合、頻度の低い稀ながん種、小児がん、脳腫瘍などに対する開発は企業戦略の範疇外です。この企業開発のギャップを埋めるためにNCI・CTEPがハイリスクを覚悟で稀ながん種に対する抗がん剤開発にも着手することになります。

その他、製薬会社が手をつけない抗がん剤の適応拡大を行うこと以外に、CTEPに課せられた重要な仕事があります。バイオマーカーに関する一連の開発です。バイオマーカーの開発は臨床領域の研究者と臨床前の段階の開発を行う研究者との共同作業で初めて行えるものであり、CTEPとDTP(Development Therapeutics Program創薬プログラム)との密接なコラボレーションにより行われます。DTPはCTEPと同様にがん治療診断部門下にあるプログラムで、新規化合物の生合成、化合物を薬にするための技術、候補となりそうな化合物のスクリーニング、動物実験、そして薬が分子生物学的なターゲットをブロックしたときに変化するマーカーの同定(バイオマーカー)とその測定法の開発などをおこなっています。CTEPとDTPの関係は表裏一体の関係にあります。

もう少し詳しくバイオマーカーについてご説明いたします。バイオマーカーとは大まかにわけて4種類ありますが、そのうちがん治療薬開発で注目されているのは二つ、一つは、ある抗がん剤に対して効果のありそうな患者さんを選別することのできる予測マーカーといわれるもの、もう一つはある抗がん剤が分子生物学的レベルで細胞内の伝達経路をブロックしていることを確認するためのものがあります。過去10年、分子標的薬といわれる種類の抗がん剤が開発の主流となっており、この薬は従来の化学療法と異なり、投与量をかなり上げても際立った副作用がでてこないものが多いため、薬の最高許容量を従来のように副作用の出現で決定しにくくなりました。また、分子標的薬は単剤ではがん細胞を殺すことができなかつたり、殺しても短期間のうちに薬に対して「耐性」を獲得することが多いので、2種類以上の分子標的薬を使って治療することが主流となってきています。多剤併用の的確な薬の量はバイオマーカーを補助的に使うことにより効率よく決定されるため、バイオマーカーの開発は早期の抗がん剤開発にとって有効手段です。もう一つの予測バイオマーカーについては、その用途が確立された場合、あらかじめ薬の効果が予想される患者さんを選別して治療することができるようになります。現在この分野の研究が抗がん剤開発の重要な位置を占めています。私たちもこの分野の研究を現在盛んに行っておりますが、この種のバイオマーカーの確立、つまり一般に患者さんの選別の手段として使えるようになるためには、マーカー候補を臨床試験に組み込んで抗腫瘍効果との相関性を確かめるテストを行わなければならない、役に立つマーカーが世の中に出るまでには、思いのほか大変な労力が費やされています。細胞内の伝達路を薬がブロックしているかどうかを確認するマーカーの開発を具体的にご紹介しますと、まず実験ネズミにヒトの腫瘍を植え込み、薬の投与前後に実際臨床で使用する生検針というもので腫瘍の組織の一部をとり、あらかじめ確立しておいた測定法を使い、微量な検体からでも信頼性の高い測定値を得られるかどうか、シミュレーションをします。これがうまくいけば、次に臨床試験に参加された患者さんに同様に腫瘍の生検を行い、針の先に相当するサイズのわずかな検体量からでもマーカーの測定が誤差なく定量できるかどうかを確認し、その結果オペレーションプロシージャ基準(SOP)を確立、さらにその手法を用的確な臨床試験を行



い、バイオマーカーを使用することで薬が実際に患者さんのがん細胞の中のある伝達路を予想通りにターゲットしていることが科学的に証明されることになり、以後行われる大規模な臨床試験に対してより確証性を与えることとなります。

最近ではがんの分子生物学情報を集めることにより、同じ臓器にできるがんでも個人によって異なるということが分かってきました。さらに厄介なのは、同じ個人からとってきたがん細胞でも生検部位によって異なる遺伝子情報をもっていることも解明されてきました。このような事実から、従来通り同じ腫瘍を持つ患者さんに同じ治療を提供するという事に矛盾がでてきました。現在ではがん細胞の遺伝子情報を解析することによりがんの原因を突き止め、その原因にあった治療法を提供するという個別治療の研究が盛んに行われていますが、そのほとんどは臨床試験という枠組みのなかで実施されています。しかしすべてのがんの原因が遺伝子情報のみで解明されているわけではないのです。重要なことは臨床試験を行わなければデータの解析ができず、より改善された医療を提供することができないという事実です。

最後になりましたが、日本ではCTEPの役割を担う部門が公共機関に存在しないため、抗がん剤の臨床開発は主に製薬会社任せのままで現在に至っています。その結果、稀ながん、企業の開発計画にない腫瘍に対して、海外で使用されているがん治療薬が日本では承認されていない、つまり国民皆保険制度のため承認がなければ治療費はカバーされないという問題が生じます。国、研究者、そして企業の努力の結果、近年そのような状況も少しずつ改善されつつあります。しかし残念なことに日本では大学の研究者発の有望な化合物の多くは、結局は薬として開発されずにおわってしまうことがあります。薬として世の中に出すまでには先にご説明したような数々のステップを踏まなければならない、このギャップを埋めるための資金援助をはじめ政府による支援の仕組みがシステムとして存在しないことが大きな要因となっております。そのような日本の現状をみるにつけて、海外で行われている各国の異なるシステムを研究し、日本にとって一番の得策を見出すことが必要なのではないかと思われれます。外資系の製薬会社の多くの研究所が日本から消え去り、他のアジア諸国へ移動しているなかで、日本はがん治療薬開発の後進国となる可能性も否定できないという危機感を持っていただきたいと思います。日本を離れて21年経ちましたがやはり祖国の将来は気になります。私のできる範囲で日本にいる同胞達の力になりたい、役に立ちたいという思いから、過去3-4年間に日本の産官学の研究者、医療関係者を対象に度々東京及びワシントンDCでがんの臨床試験に関するワークショップやシンポジウムを開催してきました。米国を含めた海外の例を紹介することにより、日本におけるがん治療薬の開発にまつわる数々の問題点を再認識していただき、その解決策を日本自ら講じていただけるよう、CTEPの同僚、及び英国、韓国や日本のコラボレーターらと共に啓蒙活動をおこなってきました。2012年の抱負の一つとして、抗腫瘍効果の高い新薬の前臨床及び臨床研究開発を行うとともに、日本のがん治療の発展のお役にすこしでも立てるよう一層の努力を重ねてまいりたいと思っております。商工会の皆様からのご理解とご支援をいただけますならば幸いと存じます。

武部直子 Naoko Takebe M.D., Ph.D.

Senior Investigator, Investigational Drug Branch

Cancer Therapy Evaluation Program, Division of Cancer Treatment and Diagnosis

National Cancer Institute

CTEP web site: <http://ctep.cancer.gov>

Cancernet website: <http://cancernet.nci.nih.gov/cancertopics>

## 「亜米利加剣道始末記 其の四」

日本国大使館経済班 清水 延彦

大使館の清水です。今回でこのコラムは最後となります。連載させていただいている間に季節は移ろい、今は冬となりました。日本であれば稽古が最も辛く感じられる季節かもしれません。昔ながらの道場であれば、中は外気と変わらない位に寒く、床は足の皮がひび割れるほどに凍てつきます。そして、年が明けて1月には寒稽古が始まります。寒稽古は、仕事や学校が始まる前のまだ暗い早朝に稽古を行うもので、大体、一週間から長ければ数週間程度にわたって連日行います。一方、こちら米国、少なくともDC地域では、厳しい冬の稽古というイメージはありません。稽古に使われる施設には少なからずエアコンが整っていますし、早朝稽古というのもどこかしの施設を借りている立場では難しいのだと思われます。しかし、こうした厳しい冬の稽古というのは、剣道をするからには是非とも経験してほしいと思います。精神鍛錬というだけでなく、真冬の早朝稽古のような非日常性の中に身を置くことで始めて気づくことあると思うからです。日本での寒稽古の際、一度、禊(みそぎ)というのをやったことがあります。道場が神社だったため、神職と同じような、早朝に水を浴びて体を清めるという儀礼をする機会があったのです。夏であれば気持ち良いのですが、真冬ではそうはいきません。気を張っていないと寒さで体が動かなくなり、危険な状態にも陥り得るものです。こうした禊で冷え切った体を通して、初めて体感できたのが、冬の弱々しい朝日の光の暖かさでした。思うに昔の神職はこうして、自然に対する畏敬の念を日々新たにしていたのだと思うのです。禊ほどではなくとも、朝の真っ暗闇の中を霜を踏みながら道場に通ったり、稽古の最中に朝日が昇ってくるのを見たり、そうした非日常的な空間の中で色々美しいものを見てきた気がします、そうした経験を多くの人にも知ってもらいたいと思います。



日本の寒稽古の様子

さて、米国での剣道の話に戻ります。米国に来てから2年近くが経ちましたが、その間、色々な稽古の機会を求めて、剣道のセミナーに参加したり、ニューヨークの道場に稽古に行ったりしました。セミナーというのは、段位の高い著名な先生が巡回して開かれる規模の大きな稽古会で、米国在住の高段位の先生によるもの他、日本から派遣された指導員によるものなどもあります。ある程度、米国内の競技人口が大きくなった今に至っても、日本に比べれば高段位の先生は圧倒的に少ないため、こうした高段位の先生から指導を受ける数少ない機会を求めて、多くの剣道家が参加します。中でも、米国在住の高段位の先生によるセミナーには、日本に比べれば稽古の機会や場所に恵まれない中であって、如何にして段位を登り詰めることが出来たのかという関心も手伝って多くの人が集まっているように思われます。もっとも、たいいていの場合、こうしたセミナーの場で教わるのは、如何に基本が重要であるかという点に尽きると感じます。むしろ、日本以上にそうした基本重視の姿勢が貫かれているようにすら思います。ただ、そうした基本習得を図るために、たとえばフットワーク(足さばき)について、あまり日本ではお目にかかれないようなステップを踏んだり、よく知られた定型的稽古方法の形を少し変えてみたりと、色々な稽古の工夫の仕方が示される点は、日本人の目にも新鮮に映りました。



セミナーの様子

ニューヨークの道場には、昨年11月に行きました。日本人が多いという土地柄からいくつかの道場があり、ニューヨークでの滞在日程と都合の合う道場へ、アポ無しで行ってみることにしました。行って見たのはマンハッタンの南に位置する道場でしたが、DCに比べると圧倒的に地下鉄の便が良いので、日本に近い感覚で稽古に通うことができとても快適でした。このときにお邪魔した道場は、わざわざ剣道のために一から作られたとのことで、狭いながらも日本で見かけるようなしっかりした板張りの道場でした。先生から伺ったお話によれば、この道場は1950年代後半から活動を開始したとのことで、そんな昔からニューヨークには稽古が出来る環境があったのかと驚きを覚えました。稽古内容については、日本人が多くいるためか、日本の一般的な稽古方法とほぼ同一と思われました。また、道場間の交流が盛んらしく、合同の稽古機会が設けられるなどしているとも伺いました。



ニューヨークの板張りの道場

今や剣道は、DC、ニューヨークにとどまらず、その他の都市でも見られます。そうした米国各地の剣道家の多くが、年に数回開催される昇段審査(格上の段位を得るために受ける試験のことです)に向けて稽古に励んでいます。実は、私も、米国滞在中に昇段審査を受けることを一つの目標としています。これまで触れる機会がなかったと思いますが、私の現在の段位は三段で、次は四段の審査を受けることとなります。幸い、日米間で段位は相互通用することになっているので、米国で段位を取得することが可能になっているのです(最高峰の八段は日本でしか取得できません)。審査内容は、実技、型、論述試験(事前に作成して提出する方式です)の三つからなり、これも日本と変わりません。たとえば、論述試験の公表資料によれば、たとえば次のような設問があります。

A) Describe the benefits of the Kendo Kata and its relevance to Shinai Kendo

B) Describe the "Zanshin"

一般の方が見ると、日本語混じりなので、奇異に見えることでしょうか。"zanshin"というのは、日本語では「残心」と書きますが、要は相手に有効な攻撃を加えた後も、油断することなく、心身ともに次の動作に備える状態のことで、これが出来ていないと「一本」とは見なされないため、とても重要なポイントなのです。こうした言葉を巡る設問が、米国人に対して出題されているということに、一般の人は驚かれるのではないかと思います。

昇段審査は、剣道家にとって大きな節目であり、単なるランキング以上の意味を持ち、これに臨むに際しては少なからず準備をするもので、自分同様、多くの米国人もまたこれに向けて切磋琢磨しているのです。日米の剣道事情に様々相違はあれど、ある程度の段位を得た人に限れば、剣道に対する考え方や心持に大差はありません。何より、武士道という剣道の根幹概念が、ある種理想化された人間のあり様のことであり、そこに国を超えた普遍性があるのではないかと私は考えます。つまり、武士道を解する米国人というのは何ら不自然でないということです。映画「スターウォーズ」に出てくるジェダイにしてもどこか武士道的ではないでしょうか。



ニューヨークの道場にて

剣道には「交剣知愛」という言葉があります。「剣を交えて愛しむ(惜しむ)を知る」と読み、剣を交えることで互いに理解しあい人間的向上を図ることを教えた言葉とされています。この言葉のとおり、剣道を通して人間相互の理解を深めていければと思います。(完)

## 「DCじゃ～なるー第6回」

袴田 奈緒子

### 【GOP候補指名レースはマラソンに？～表面化する内部分裂】

1月3日のアイオワ州党員集会で正式にスタートした今年の共和党候補指名レース。アイオワはサントラム氏、ニューハンプシャー(1月10日、予備選)はロムニー氏、サウスカロライナ(1月21日、予備選)はギングリッチ氏と、最初の3州それぞれで勝者が異なるという異例の幕開け。昨年夏からめまぐるしくフロントランナーが変わるなど「本命不在」の混戦状態が続いてきた流れを象徴する滑り出しとなった。

当初、ロムニー氏が8票差でアイオワ州を制したと伝えられ、次のニューハンプシャーで手堅く勝利したことから、サウスカロライナでも勝ち3連勝すれば、あっけなく指名レースが決着するとの雰囲気が漂っていた。状況が一変したのは、サウスカロライナの予備選に突入する直前の約1週間。再集計の結果、アイオワ州での勝者がサントラム氏であったと発表されたうえ、資産家ゆえに庶民感覚に欠ける点を糾弾されたり、「投資会社の冷徹な経営者」と批判されたりして支持率が急落。サウスカロライナでギングリッチ氏に思わぬ大敗を期し、早期決着シナリオは急速にしぼんでしまった。



4番目の予備選(1月31日)の舞台は、本選挙でも重要な大票田フロリダ州。豊富な資金力を武器にした大量のCM作戦などでギングリッチ氏の勢いを断つことに成功。約14ポイントの差をつけて勝利し、再び主導権を握った。ただ、依然として予備選の長期化を予想する見方が広がっている。

その背景には何があるのか。大きくまとめると、次の4つに集約される。

#### ① 保守派の根強いロムニー不信

過去に妊娠中絶や同性婚を容認したり、マサチューセッツ州知事時代に健康保険の皆保険制度を導入したりしたロムニー氏に対する保守派の不信感はいまだ根強い。高齢者、女性、ヒスパニックなど幅広い層、地域の支持をくまなく集め圧勝したフロリダ州でも、自らを「非常に保守的」と考える層の間では、ギングリッチ氏に投票した人が43%、ロムニー氏は29%(出口調査)。回答者の約4割が「ロムニー氏は十分に保守的ではない」と答えた。

保守的な地域の集会では「ABR(Anybody but Romney-ロムニー以外なら誰でも)」とのプラカードを見かけることも少なくない。昨年12月に、雑誌「TIME」が「WHY DON'T THEY LIKE ME?」と題し、ロムニー氏がなぜ共和党の中核である保守層の心をなぜつかめないかを特集したことも象徴的だ。保守層に支持が浸透していかない限り、ギングリッチ氏らが戦いを続ける口実を与えてしまうことになる。

## ② 代議員獲得方法の変更

共和党の候補者選考プロセスは、それぞれの州で実施する予備選や党员集会を通じ、各州に定められた代議員数を獲得。それを積み上げていき、代議員総数の過半数にあたる1,144人に達した候補が勝者となる仕組みだ。2008年のマケイン氏、2000年のブッシュ(息子)、1996年のドール氏、1988年のブッシュ(父)と共和党の直近の候補者はいずれも本選挙の年の4月までに指名を確実にした。

この代議員獲得方法を巡り、今回の選挙から大幅な変更が実施された。これまで共和党では1位となった候補がその州の代議員をすべて獲得する勝者総取り方式を採用していたが、今年から、1-3月に予備選を実施する州は原則として、得票数に比例して議員数を割り当てる方式に変更した(フロリダなどいくつかの州は従わず、勝者総取りを採用)これによって、1位候補の獲得議員数が1,44人に達するに時間がかかるようになったほか、2位以下の候補も代議員を増やしていくことが可能なため、長期戦になりやすいとみられている。実際にフロリダ予備選を終えた時点でトップのロムニー氏が獲得した代議員は87人にすぎない。ギングリッチ氏やポール氏は夏の党大会まで戦い抜く意向を表明している。



2008年の選挙で比例配分方式を採用していた民主党は、オバマVSヒラリーの戦いがもつれたことで党全体が活性化。メディアの注目も集まり、本選挙でも優位になったとの共和党側の反省から、今回の変更に至ったとされる。

## ③ 勝手応援団? 「スーパーPAC」の恐るべき影響力

今回の予備選の最大の特徴とも言えるのが、「スーパーPAC(政治活動委員会)」と呼ばれる各候補者を支援する外部団体の影響力だ。サウスカロライナやフロリダでの投票直前にすさまじいまでに繰り返し流された対立候補の中傷CM。その約半分は候補者本人の陣営ではなく、スーパーPACによるものとされる。ロムニー氏を「利益を上げるためなら何でもする冷徹な経営者」などと批判したCMはサウスカロライナ予備選での同氏の敗北に、ギングリッチ氏を「下院議長の職を追われ、リーダーとして不適格な人物」としたCMはフロリダでの同氏の敗北に、それぞれ少なからず寄与した。ロムニー、ギングリッチ氏とも直前の予備選での大勝の勢いを、大量のネガティブCMによって断ち切られてしまった格好だ。今回の予備選は勢いが続かないことも大きな特徴とされるが、スーパーPACによる中傷CMの生み出す負の力が、各候補の浮き沈みを激しくしている面がある。



また、スーパーPACは候補者の「寿命」を長くする効果も発揮した。資金力のなさがアキレス腱だったギングリッチ氏。アイオワ党员集会はロムニー陣営による中傷CMの影響などで惨敗。ニューハンプシャー州でも苦戦し、命脈尽きるかと思われていたところに、ラスベガスのカジノ王が500万ドルをギングリッチ氏支持のスーパーPACに投入。これを元手にロムニー批判のCMを繰り返し流され、サウスカロライナ州での勝利につながった。カジノ王はフロリダ予備選を前にさらに500万ドル以上寄付したもようで、

今後の追加的な資金供給にも前向きと伝えられている。スーパーPACなき時代であれば、ギングリッチ氏のような「金欠」候補は、資金が尽きた時点でゲームオーバーとなっていたであろう。

スーパーPACが大統領選のプレーヤーになるのは今回が初めてだ。2010年1月の連邦最高裁判決(シチズンズユナイテッド判決)で「企業や組合にも言論の自由がある」との判断を示し、上限なしの資金提供が可能となった。この資金の受け皿であるスーパーPACは建前上は候補者と連携することは認められず、「勝手応援団」に徹しなければならないのだが、実際は各候補者の側近らが運営していることが多く、その境は非常にグレー。最近ではテレビCMなどの「空中戦」だけでなく、ボランティアスタッフを動かしたり、事務所を立ち上げたりするなど、通常の選挙スタッフとそんな活動に携わることも多いという。

#### ④ 根強い党内対立) 主流派VS草の根保守派

オバマ大統領への反発がとにかく強い共和党サイド。「打倒オバマ！」で一致団結しているかと思いきや、その内部にはここ数年来続く深刻な亀裂がある。「小さな政府」を旗印に、徹底した歳出削減を求める草の根保守派(ティーパーティー)。「小さな政府主義」は尊重しながらも、時には是々非々で歳出拡大につながる政策もやむを得ないとする主流派。2010年の中間選挙は、草の根保守派を取り込むことで議会下院多数派の地位を奪還した共和党だったが、去年夏の債務協議あたりから、妥協を許さない「草の根保守派」に手をやく主流派という党内の対立構図が鮮明になってきた。



その構図が予備選の過程で一気に顕在化したのは、サウスカロライナ州での予備選の直後だ。下院議長経験者でありながら「反乱者」「一匹狼」のイメージが強いギングリッチ氏は、過激な発言も多く、主流派からすると大統領になる資格がない人物。ギングリッチ氏の大勝で危機感を募らせた主流派は、相次いでメディアに登場。「ギングリッチ氏が候補者になったら、壊滅的な結果をもたらす」と警鐘を鳴らした。共和党主流派が大統領候補に保守系候補を敬遠する背景には、1964年の大統領選挙で保守強硬派のゴールドウォーター上院議員を選び、本選挙でリンドン・ジョンソン大統領に歴史的な大敗を喫した苦い記憶があるとされる(共和党は以降何十年にわたり、主流派が支持する候補を選び続けてきた)。

ただ、こういった主流派による攻撃を受けること自体が「反主流派の証」とばかりに、ギングリッチ氏は「真の保守」を今まで以上に自任し始めた。オバマ大統領や民主党はもちろん、共和党主流派への嫌悪感も隠さない草の根保守派が今後ギングリッチ氏のもとに集まり、一定の勢力になる可能性がある。実際、サウスカロライナでは「主流派が支える候補(ロムニー氏)は信用できない。現状を打破してくれる人こそ必要だ」と考えた層がギングリッチ氏支持に大挙して流れた。ペイリン前アラスカ州知事や大統領選を途中まで戦った実業家のケイン氏など、保守派に絶大な人気の政治家がこぞってギングリッチ氏を支援しており、今後どの程度の力に育っていくのか注目される。

最終的に主流派が望むロムニー氏が候補に選ばれる場合、長期間の泥沼の戦いを経て、草の根保守派が離反するようなことがあれば、本選挙を含め今後に大きな禍根を残すことにもなりかねない。なかなか決着しない予備選は内部分裂に悩む共和党の今日の姿を映す出す鏡と言えるだろう。



## ワシントンおとめ Vol.5



アメリカの国会議事堂(キャピタル)はホワイトハウスと並ぶワシントンの名所になっていますが、そのすぐ近くにある米国議会図書館(ライブラリー・オブ・コングレス)は知る人ぞ知る、通好みのスポットかもしれません。今回は議会図書館で司書をなさっている中原まりさんにご登場頂きます。雑誌も含め、懐かしい日本の読み物が豊富に揃う議会図書館。皆様も一度行かれてみてはいかがでしょうか。

～略歴～



中原まり(なかはら・まり)

東京都文京区生まれ。1988年、武蔵工業大学建築学科卒業。90年、東京都立大学大学院工学研究科修士課程を修了(建築学専攻)。94年同博士課程修了(同)、同大学院助手に。96～97年、1年半サバティカル(研究休暇)をとり、米国へ。コロンビア大学建築学部図書館とニューヨーク近代美術館のアーカイブ(公文書館)で研修。その後、日本の大学に戻るものの、2000年にニューヨークへ移住。コロンビア大学のドナルド・キーンセンター、ニューヨーク公共図書館などに勤務。03年、ワシントンに転居、オクタゴン美術館に勤務。07年から現職。09年、カトリック大学大学院(図書館学)修士課程修了。

.....

—現在の仕事の内容を教えてください。

「米国議会図書館のアジア部日本課という部署で司書を務めています。司書の業務は多岐にわたります。どのような書籍を入手すべきかを調査・検討したり、良好な状態で保管するための計画を立てたり、書籍の保管状況を調べて修復が必要な書籍を選別したりといった具合です。週に2回ほど、アジア部閲覧室のレファレンスデスク(利用者相談窓口)の当番に入り、来館者のさまざまな質問やリクエストに対応します」



「議会図書館内での仕事に限らず、外部の司書との交流や北米の日本コレクションの発展に努めることも重要な任務の一つです。たとえば、アジア、日本関係の学術会議に参加して、現在の研究の流れを勉強し、それに基づいて議会図書館でどのような書籍を増やしていったらよいかなどを検討します。近年、重要性が増しているのが、利用者の増加に向けた『アウトリーチ』の活動です。講演会や展覧会など多くの方が興味を持ってくれそうなイベントを企画して、議会図書館の所蔵物を紹介します。例えば来年は東京からワシントンへ桜が寄贈されてからちょうど百年にあたるので、議会図書館内に存在する桜に関する多数の資料を利用した展覧会を企画しています。図書館ももはや『待ち』の姿勢では通用しない時代に突入しており、積極的に来館を促していくことが必要な時代になっているというわけです」

—どういうときにやりがいを感じますか？

「議会図書館は職員が約3,500人にもものぼる非常に大規模な職場で、仕事が細分化されているという意味では難しい点もありますが、自分のアイデアや心意気次第でスケールの大きな仕事ができることは魅力的ですね。自分の専門性やバックグラウンドをフルに生かした企画を無事やり遂げたときなどは大きな達成感を感じます。日本人であることをいかし、図書館の所蔵物を使って日本の語学や文化を広めていくことができるということにも喜びを感じます」

「議会図書館には30年以上勤務なさっている方が大勢いるので、5年目の私は『ベビー』にすぎませんが『あなたはまだ若輩だから、そういう提案や企画を持ち上げるべきではない』というような態度をとられたことがないという点も気に入っています。自分の計画を前進させていけるだけの責任感と実行力さえあれば、非常にやりがいを感じることができる職場です」



#### —仕事上の課題は何ですか？

「私はもともと建築出身で、議会図書館のアジア部日本課が扱っている書籍の専門家というわけはありません。昔、建築関連のアーカイブで仕事をしていたときに比べると『専門性の欠如が(利用者への)サービス低下につながっているのではないかと』いつも疑問を抱いています。所蔵物やそれらの内容に精通しているほど、閲覧者によりよいサービスを提供できるわけですから。日本課の蔵書を4年かけて勉強してきましたが、118万点もあるうえ、旧陸海軍の資料など希少価値の高いコレクションすべてに詳しくなるには、まだまだ時間がかかります。今後、自分がどこまで成長していけるか、アジア部日本課に自分がどのような特殊性を持って貢献していけるか、という点が現在の課題だと思います」

#### —現在の仕事についての経緯を教えてください。

「長いストーリーになります。私はもともと建築の歴史や意匠の専門家です。博士課程の学位論文でアメリカの建築家の研究を主題にしたので、その研究のため、ニューヨークのコロンビア大学や歴史協会を頻りに訪ね、原資料(図面や建築家が施主に当てた手紙など)にあたることになりました。建築の原資料を見ているうちに、米国では資料をきちんと保存して将来の資産として残しておくという仕組みが確立されていることに感銘を受けました。同時に、日本における建築の原資料の保存状況に疑問を抱くようになり、大学で教鞭をとる傍ら、建築資料の保存問題に関わるようになっていったのです。ただ、当時の大学ではそういった活動が教職員の活動としては認められておらず、建築アーカイブがすぐに設立される動きもほとんどありませんでした。96年から1年半、フルブライトの若手研究員奨学金と文化庁の奨学金でアメリカのアーカイブで研修する機会に恵まれたことで、建築アーキヴィスト(司書)になる夢が一段と膨らみました。ちょうどグリーンカード(米国永住権)の抽選に当たったこともあり、環境の整っていなかった日本を離れて、2000年にアメリカへ移住し、司書の道を究めることにしました」

「当初は正式な職もなく、写真家のアシスタントをしたりしていましたが、少しずつ日本の文化や日本語を使う仕事の誘いがかかるようになりました。コロンビア大学のドナルド・キーン日本文化研究所でプログラム・コーディネーターを勤めたのもその一例です。司書業に就いたの





は、ニューヨーク公共図書館でデジタル化のプロジェクト・アシスタントとして採用されたところからです。その後、2003年に初めてのフルタイムの仕事として、ワシントンのアメリカ建築財団から建築コレクションを保存・管理する仕事のオファーを頂きました。5年ほど働きましたが、景気後退のあおりを受け、コレクション自体が閉鎖されることが予想されるようになり、仕事を探していたところ、運よく議会図書館での現在のポジションを見つけ、応募し、採用されたというわけです」

—長期的な今後のキャリアプランをお聞かせください。

「まだ先はあまり見えていませんが、議会図書館の修復部門で働いている夫(アメリカ人)が転職することはまずないので、私もかなり高い確率で議会図書館での仕事を続けていくと思います。ただ、アジア部日本課にとどまるかどうかはわかりません。せっかく巨大な職場にいるので、その醍醐味を経験してみる、というのも司書としての自分の視野を広げる意味で必須だと思うからです」

—ワシントンで気に入っている点は何ですか。

「ワシントンニアンの穏やかな気質でしょうか。ニューヨーカーに比べるとみんな親切で、穏やかだと思います。ワシントン近郊(メリーランド州)で購入したコンドミニウムで主人に出会ったのも、ワシントンならではの奇跡と思っています(笑)多くの美術館が入場無料であることも魅力的ですし、緑が多く空が開けている点も大好きです」

「今でこそワシントン生活を満喫している私ですが、東京生まれの東京育ち、同じく大都会のニューヨークで暮らしていたため、当初ワシントンに来ることに対して多少の迷いがあったことも事実です。ニューヨークはレストランや買い物をするお店がたくさんあり、とても魅力的なところでしたが、当時は経済的にも時間的にもニューヨークの素晴らしさを満喫できていたわけではなかった。電車で3時間で行けるワシントンならば問題ないかな、と自分に言い聞かせ、転居を決めたというわけです」

—オフの過ごし方を教えてください。

「2年半前に結婚し、主人と家を購入してからは、家の手入れや庭作業などに追われています。週に2日のお休みでは足りないですね。。掃除とショッピングであつという間に週末が終わってしまいます。主人の連れ子(犬)がすでに19歳なので、結構手がかかっていますが、子供のようにかわいくて、かなりの時間を彼女と過ごしています。老犬には 長生きしてもらいたいです。もし彼女が逝ってしまつて、ペットのことを心配する必要がなくなつたら、主人と海外旅行を楽しみたいね、と話しています。長期的には主人と社交ダンスを習う計画もあります！」



—今後の人生設計は？

「主人が退職するまではワシントンから動くことはまずありません。日本に帰国するかどうか、についてはまだ結論が出ていません。難しい問題ですね。『歳をとったら日本が恋しくなるわよ』とおっしゃるかたが多いですし、自分でも何となく理解できますが、現状ではアメリカを基盤にすることになるのではないかと考えています。最近、ドナルド・キーンさんが日本への永住を決意なさつたというニュースを聞きましたが、自分の人生の大半を過ごしたところが自分の『都』になるのではないのでしょうか。そうは言っても、私はもちろん、主人も日本が大好きなので、経済的に可能であれば、老後はアメリカと日本で半分ずつ過ごしたいなと考えています」

(聞き手は袴田奈緒子)

## ワシントンの映画好きによるリレー連載：第6回 「ワシントンで気ままに映画を語ろう」

ぽっちみみ

ワシントンDC在住の映画好きが順番に執筆しているこのシリーズ、第6回は私、ぽっちみみが「普通の視点」で映画について気ままに語りたと思います。前号、前々号と2回に渡り、ちびO子氏、かっぱ谷氏がB級映画について熱く語っておられましたが（非常に奥が深い！）、私は両氏のようなハードコアな映画ファンではなく、面白そうな映画が封切られると映画館に観に行くような映画ファンです。自分を映画ファンと呼ぶのも気が引けます。しかし少々マニアックな内容が続き、読者離れが気になるところでもありますので、今回は多くの方に楽しんでいただけるような映画数本と注目の俳優さんたちをご紹介します。

今回のキーワードは前号担当者のかっぱ谷氏にご指定いただいた「トラウマ」です。年明け一本目としてはちょっとアレな感じもしますが、第1回の執筆者、枝田淳氏が制定された10のルールの中の1つ目に、【ルール1: 前号で指定されたキーワードに関する映画等の話で書き始めること】とありますので、空気を読むことはせず、はりきって参ります。

私にとってトラウマになっている映画は2本あります。まず1本目は「フラッシュダンス」（原題：Flashdance、1983年公開）。言わずと知れた名作です。主演のジェニファー・ビールのいいダンス、挑発的な振り付け、キャッチーなBGM、かっこいいレグウォーマー、どれをとっても文句なし。椅子を使って踊る主人公が上から大量の水を浴びるあの名シーンは、20年後の2003年にアメリカ音楽界のディーバ、ジェニファー・ロペスがミュージックビデオの中で再現しました。

この名作が日本で公開された1983年夏のある日、当時小学校低学年であった私は母親と近所に住む太田さんに連れられ街の映画館へと繰り出しました。涼しい映画館でスクリーンいっぱい広がる夢のようなエンターテインメントにすっかり魅せられた女3人。興奮冷めやらぬまま、「レグウォーマー、私も買おうかしら」などと話しながら当時の国鉄に乗って帰宅すると、そこで私たちを待っていたものは…家中、足の踏み場もないほどに埋め尽くされた衣類、雑貨、書類…引き出しという引き出しはすべて開けられ、入っていた物はすべて引っ張り出されていたのです。

「空き巣に入られたわ！」と叫ぶ母。110番通報する太田さん。締め切って蒸し暑くなっていた家の中、どこもかしこも物凄い勢いで荒らされている光景はあまりにもインパクト大。この体験から、まだ幼かった私の脳内には「フラッシュダンスを観る時は空き巣に注意」という警告がインプットされ、これ以降この名作を見るのを躊躇するようになってしまいました。

この空き巣事件、本稿の趣旨から脱線しますが、続きが気になる方のためにオチまでご説明します。

通報してからしばらくすると警察の方々が続々と到着しました。テレビの刑事ドラマでよく見る、あの鑑識班の登場です。家の外回り担当の人たちは犯人の足跡と侵入経路を捜索。家の中担当の人たちは銀粉をポンポンして指紋採取です。そしてちょっと偉い風の人には母に事情聴取していて、何時から何時まで家を空けたのか、すべての戸は施錠されていたのか、何か無くなっている物はないか、などと大人の会話をしています。

目の前の展開にすっかり心躍らされた私は、指紋採取係に密着し捜査に参加。指紋の採り方を教

わったのでした。と、ここで犯人の指紋が出ることも出ることも。素手でいろいろなところをべたべたと触ってくれたおかげで、犯人は2人組みだということが判明しました。また、その犯人たちは裏に面している窓を割り、その窓の真下に置いてあった金庫を踏み台にして(笑)家の中へ侵入したことも分かりました。そして気になる盗難被害ですが、冷蔵庫で冷え冷えになった缶ビール2本とハムのみ(驚)。つっこみどころ満載の犯人グループです。

こんなゆるゆる犯人グループなどすぐに捕まるとタカをくくっていたのですが、うちの飼い猫一匹のみが目撃者だったということもあり、その後犯人に結びつく有力な情報が得られず捜査が長引いていきます。また犯人が戻ってくるのではないかと、その時に一人で留守番していたらどうしよう、などと小学生の私は不安な思いで毎日を過ごしていました。そして秋風の吹くある日の夜のこと。母と一緒に帰宅すると、玄関に警察からの伝言メモが一枚。「去る〇月〇日に起きました盗難事件の被疑者を逮捕しました。つきましては下記までご連絡ください」聞くところによると、捕まったのは中学生男子2人組だったそうです。かくして平穏な日々が戻ってきたのですが、それ以降私がフラッシュダンスを観ることはなくなったのでした。

トラウマになっている映画の2本目は、「幻影師アイゼンハイム」(原題: The Illusionist、2006年アメリカ公開)。エドワード・ノートンとジェシカ・ビール主演、ポール・ジアマッティ助演で、幻想的な映像が印象に残るこの作品は、第79回アカデミー賞撮影賞にノミネートされました。この作品は19世紀末のウィーンを舞台に、イリュージョンを見せて観客を魅了する幻影師(ノートン)と公爵令嬢(ビール)が身分の隔たりを越えて惹かれあうラブストーリー。なのかと思いきや、物語は殺人事件を機にサスペンスへと変わっていきます。そして終盤では誰もが驚く展開に。ノートンのミステリアスな演技と最後まで結末がわからないすばらしい脚本。間違いなくお勧めの一本です。まだご覧になっていない方はぜひ今度手にとってみてください。

この作品が封切られて間もない2006年のある日、当時すでにワシントンに住んでいた私は友人と一緒にベセスダにある映画館Bethesda Row Cinemaに向かいました。客席が暗くなり物語が始まると同時に私たちはすっかり19世紀のウィーンの街に入り込みます。観客はみな、素晴らしい映像、幻想的な音楽、俳優陣の卓越した演技に酔いしれながら、目の前に広がるサスペンス劇にのめり込んでいきました。

そして物語は佳境を迎えます。すべての点がつながり、いよいよ真実が暴かれる場面です。客席には緊張感が走り、聴衆の目と耳はスクリーンに釘付けです。私も例外ではありません。どういうカラクリなのか、次はどうなるのか、物語はどのように終わるのか、実はこうなのかもしれない、と様々な思いが頭の中をグルグル回っています。

とその瞬間、そんな私に隣に座っていた友人が不意に耳打ちします。「わかった！あの人のが実はこんなよ！」えー！！ここでまさかのネタバレ発言です。うなだれる私。「うん、そうだろうね」と私は力を振り絞って返すのがやっとです。目の前で繰り広げられる物語はそんな失意の私を置き去りにしたまま急展開を迎え、めでたく友人の予想通りの結末を迎えたのでした。

思わず耳打ちしたくなった友人の気持ちは十分に分かります。それだけ手の込んだストーリーなのです。しかしそのネタバレ発言により、サスペンス劇は私の前で一気に色褪せ、すべてが明かされたときのスッキリ感は半減です。いい作品に出会えた嬉しさと何とも微妙な後味が残った一夜なのでした。ちなみに、この友人とはコメディやチック・フリック(Chick Flick、女子向け恋愛映画)と一緒に観ることにしています。皆さん、映画鑑賞の際は途中でオチがわかってもそっと心の中にしまっておきましょう。

さて、この作品で主演しているエドワード・ノートンですが、ご存知のとおりニヒルな役や凶暴な役など幅広い演技ができる素晴らしい俳優さんです（私の勝手な思い込みですが、日本人俳優で言うと堺雅人さんが同じカテゴリーに入っているでしょう）。そんなノートンが知的障害者（を装った）役を演じたクライムサスペンス映画、「スコア」（原題：The Score、2001年公開）もお勧めの一本です。本作品はロバート・デニーロ主演で、マーロン・ブランドも出演しています。作品序盤のノートンの演技に注目です。

ノートンはボストン生まれですが、高校時代までメリーランド州コロンビアで過ごしました。そう、ワシントンDCエリアが誇るローカル俳優なのです。大学では日本語も学び、卒業後は日本で仕事をしたこともあったそうです。ワシントンエリア在住の日本人として応援したい俳優さんの一人です。

そしてローカル俳優でもう一人忘れてはならないのがサンドラ・ブロックです。ブロックはバージニア州アーリントン出身で、ノートンと同様、高校時代までこの地域で過ごしました。バージニア・スクエア駅から程近い、運動が盛んな公立高校でチア・リーダーとして活躍したそうです。その後ブロックは大学進学のためにDCエリアを離れ、ブロードウェイ、ハリウッドに進出。アカデミー賞女優へと飛躍していきました。

ブロックはもともと等身長の女性の役を演じることが多く、親しみが感じられる女性、「Girl Next Door お隣さんの女の子」として有名になりました。DCエリア在住の私たちにとって、ブロックはまさに近所に住んでいた女の子です。名実ともに身近に感じられる女優さんとして、これからの活躍に期待したいと思います。

ブロックはこれまで様々な話題作に出演してきましたが、アクション、コメディ、シリアス系など、どんな役でもこなせる女優さんという印象があります。そんな彼女を一躍有名にしたのが、1994年公開、キアヌ・リーブス主演の「スピード」（原題：Speed）。また、シリアス系の出演作ではマシュー・マコノヒー主演の「評決のとき」（原題：A Time to Kill、1996年公開）があります。こう見てみると、ブロックは、リーブスやマコノヒーなど当時新人だった俳優をスターダムに押し上げたヒット作に出演しているのがわかります。このような女優さんが次は誰と共演するのか注目するのも映画の楽しみ方のひとつですね。

昨年3月に起きた東日本大震災を受け、ブロックはアメリカ赤十字の震災・津波基金に100万ドルを寄付したと報じられました。また、ノートンは自身のホームページで多くの人々に寄付を呼びかけました。我らがローカル俳優に限らず、去年は多くのハリウッド俳優が日本に手を差し伸



女優サンドラ・ブロックが80年代に通ったワシントン・リーハイスクール（バージニア州アーリントン）



著名人からの寄付のおかげで(?)現在は新設された校舎が立ち並ぶ。



運動が盛んな学校らしく、広大な敷地には本格的な陸上競技用トラック、フットボールフィールドと観客スタンドが完備されていた。ブロックもここでチアリーディングの練習をしたのだろうか。

べ、支えてくれました。そして今年は日本がアメリカに桜を寄贈してから100年の節目の年となります。ワシントンDCでは様々な文化交流行事が企画されており、今春はいつにも増して日米の絆を深く感じる事ができるでしょう。

ということで、リレー形式でお送りしているこの連載。桜のつぼみが膨らむ頃に発行される次号のキーワードは「日米友好」とさせていただきたいと思います。日本を描いたアメリカ映画、桜が印象的な映画などをご紹介いただけるのを楽しみにしつつ、ここで筆を置くことにいたします。最後までお付き合いくださりありがとうございました。

【まとめ：今回ご紹介した映画】

- フラッシュダンス(原題:Flashdance、1983年公開)
- 幻影師アイゼンハイム(原題:The Illusionist、2006年アメリカ公開、2008年日本公開)
- スコア(原題:The Score、2001年公開)
- スピード(原題:Speed、1994年公開)
- 評決のとき(原題:A Time to Kill、1996年公開)



## ワシントン月報(第81回) 「日本の将来はバラ色」

米国弁護士 服部 健一

昨年もクリスマス時期には多数のクリスマスカードを受領させていただいたが、ほとんどのメッセージは、日本は一体これからどうなるのか、果たしてやっていけるのか、という暗いものばかりで希望に満ちたメッセージを記載したものはほとんどなかった記憶がある。これはワシントンDCに駐在する企業の方々も皆そうであろう。

では、なぜ円高現象が生じるのか。

答えは実に簡単で、外国は日本をそう見ていないということに尽きる。そして、外国がそのように見る日本の方が正しいと私は考えている。

日本の昨年の災害は地震、津波、原発事故という世界で例のない三重苦のもので、しかもそれぞれが歴史的にみても超巨大なものばかりである。これだけの大災害が一気にやってくるケースは人類の歴史でもそうないのではないか。



そのため、一時期の混乱は大変なものがあり、勿論、今でも避難生活を余儀なくされている方々も多数あり、災害は決して過去のものではなく、さらに今年の企業の業績は軒並み赤字であるが、日本が着々と克服しつつあることは疑いもない。

そして、3、4年後の日本は世界にも類を見ない災害対策優良国となると私は考えている。

まず、地震に対する対応策は一層強化される。東北の被災地も、地震自身による被害は最小限にとどめられており、地震対策は既にほとんど問題なかったようである。

津波と原発事故だけはどうしようもなかったことであるが、両方とも主因は津波そのものである。その津波もその後の探索で歴史の爪あとが明らかになりつつあり、数十年前の先人達を立てた、「此処より下に家を建てるな」という石碑があることが明らかになり、津波に対する今後の対策の手がかりの1つが見出されている。

ともあれ、この災害のために東北地方の工場は一新され、その上、堤防は格段に強化されよう。そして、この教訓は日本全国へと広がることは必至である。

つまり、3、4年後の日本は世界一の災害対策国になる。地球上の災害は必ず順に世界を訪れるものである。そのとき、日本は世界で最も災害に強い国になっており、結局相対的に日本が生き残るチャンスの方が高いと考えられる。

外国および外国人はそう考えて日本を見ているから日本に対する心配は全くなく、円高になる。

昨年、大災害が生じて間もなく、ワシントンDCのタクシーに乗ったとき、運転手は私が日本人と知ると、皆決まって、「日本は問題ない。きっと復興する。何の心配もしていない」と話していた。

彼らがそう考える理由は、恐らく歴史の教訓からだろう。第二次大戦の壊滅的打撃から日本はあるという間に復興した。戦後数々の大障害時にも、その都度問題を克服し、より強くなってきた。

その典型例の1つが第一次オイルショックである。狂乱物価となり、当時通産省にいた幹部たちや私は、日本のエネルギー産業は潰れる、自動車産業は破滅する、と真剣に考えていた。しかし、あの石油危機で日本の小型自動車が初めて売れ始め（当時米国はガソリンを垂れ流す大型車のみであった）、その後輸出が急増し、空前の好景気となり、米国は日本を拝み倒して160万台の輸出規制を行ったくらいである。

日本の躍進があった理由は技術開発を駆使して、性能のよい製品をタイミング良く作り上げたことに尽きる。この日本の技術開発の精神は、日本では単にものを作るのではなく、心の通ったものを作るという、もの作りの精神から来るのであろう。

つまり、日本人は、柔道、剣道、空手道というように全てに精神が籠った「・・・道」に築き上げていく向上心があるかであると思う。もの作りについていえば、「製造業道」とでもいうべきものだろうか。日本の食べ物やレストランの数の多さ、種類の多さ、豊かさ、品質の良さ等は、ミシュランの星のつくレストランがフランスさえも凌駕して、世界一多いことから明らかであるが、これは食い意地が張っていることからだけでなく、世界一の品質、美味さ、種類の多さでなければ満足しないという日本人の美意識、生活水準の高さから来る要求のためであろう。これは「美食道」とでもいうのだろうか。

円高は確かに輸出産業にとっては痛手であるが、外国企業を買収したり、海外投資をするためには絶好のチャンスともいえる。そして、円高を利用した新しいビジネスが着々と起こりつつあるとNHKが紹介していた。

ともあれ、私は災害対策がほぼ完成し、工場が一新される3、4年後の日本はバラ色になると考えている。ただ、今の日本や日本人には、そう考えるゆとりや意地がないだけである。

確かに、韓国や中国の追い上げはすごいものがあるが、全ては日本が開発した技術や分野を、国を挙げて投資しているからである。これは正に日本が数十年前に行ってきたことである。しかし、欧米はそれをJapan Inc.と非難し、独占法違反で詰め寄り、財閥的動きは一切封じられてきたが、今後は再び財閥再生が必要かもしれない。それほど技術開発投資、ビジネス活動は巨額になり、一企業では対応できなくなっている。

ところが、日本のジャーナリズムは、日本の悪いところばかり重箱の隅をつついて書き出し、とにかく日本を最低の国として描写しなければならぬ自虐感をもっているようだ。これが、日本を恨む近隣の国々による情報操作のためかどうか知らないが、日本はもっと世界と比較した客観的な日本を見つめて、もっと自信をつけるべきだろう。

どうも日本について本当に自信を持っている人々は外国人であり、ワシントンDCのタクシーの運転手のようである。

(つづく)

## ワシントンソーシャルライフ： 「2:46 and thereafter」

Shigeko Bork mu project

シゲコ ボーク

年末に行ったシカゴもマーティンルーサーキングディのニューヨークも凍り付く様に寒くて、加えて先週はDCでも雪が積もり「フロリダに行きたいなあ」と思いながら毎日を過ごしています。ですから今の所毎週末元気にスキーに出かけて行く夫と娘とは週末別行動で、一日中映画と美術館三昧なのです。

そこで今回はこの冬一番お勧めの展覧会、麻生和子さん率いる日本の若手アーティストグループ「団・DANS」と私が理事を勤める非営利アート団体トランスフォーマーとのコラボレーション「2:46 and thereafter」をご紹介します。

タイトルからも想像出来る様にこの展覧会のテーマは昨年3月11日に起こった大震災へのアーティストの思いで、若手作家達の日本が抱える破壊、喪失、悲しみ、そして復興などの作品を通じて探って行きます。

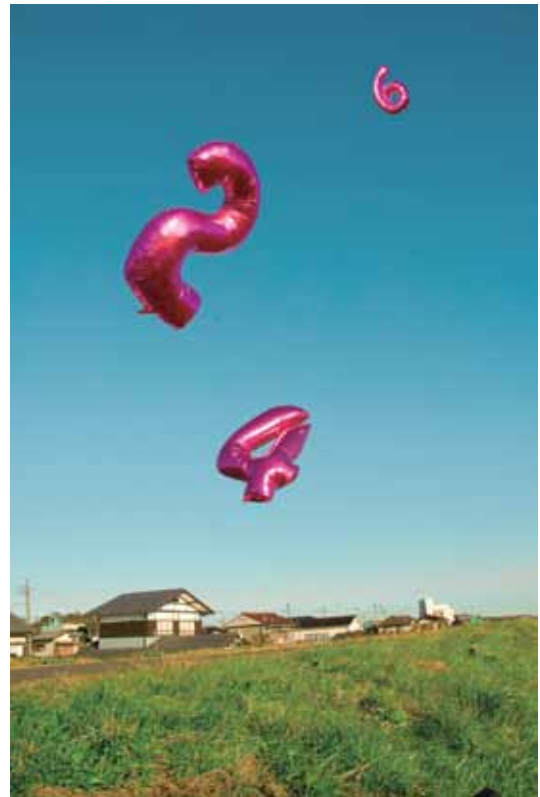
18人の日本人アーティストの作品が一挙に紹介されるこの手の大規模な展覧会はアメリカでは震災後始めてで、作品は絵画、ビデオ、彫刻、写真、ドローイングにインスタレーションと多岐に渡ります。

参加作家の一人藤田勇哉さんは今回リンゴがモチーフの絵を出展されますが、それについてこう語っておられます。

「作品のコンセプトは私の作品を観ていただくことによって秩序ある新しい世界について皆さんに考えてもらうことです。震災後、東北でも関東でも強盗や便乗値上げなどは起こりませんでした。(省略)このことを私は日本人として誇りに思います。そして世界に伝えたいと思いました。東北の人達がとった個人主義や利己主義とは正反対の、助け合う精神、理性ある行動は秩序ある新しい世界をつくるきっかけになるのではないかと私は思います。そのことを伝えるために私は東北のリンゴをモチーフにして油絵を描きます」

また作家の野口満一月さんは「東北は安全で美しい自然を失いました。元通りになるにはとても長い年月がかかるでしょう。けれど、私は信じています。東北に美しい自然が必ず蘇る事を」と語られ美しい一双の屏風を展示されます。

展覧会のタイトル「2:46」は皆さんご存知のように実際に地震が東日本を襲った瞬間で、あえてその時刻を展覧会のタイトルに選んだことからアーティストの被災地を思う真摯な気持ちが伝わ





ってくるようです。私の生まれ故郷は避難区域となってしまいましたが、この展覧会から勇気と希望を頂ける事と思っています。

展覧会はナショナルポートレートギャラリーのすぐ近くにあるEdison Place Galleryで開催されます。2月16日がオープニングで、まず4時30分から6時までアーティストによるパネルディスカッション、そして6時から8時がオープニングパーティーとなります。日本から多くのアーティストがこの日のために参加されるので、直接制作にまつわる色んなお話が聞ける事と思います。

オープニングに参加ご希望の方は[shigeko@askshigeko.com](mailto:shigeko@askshigeko.com)までご連絡ください。展覧会は3月25日まで開催です。

Edison Place Gallery  
702 Eighth Street, NW, Washington, DC 20068

開催期間中会場で多くの方々にお目にかかれる事を期待しております。

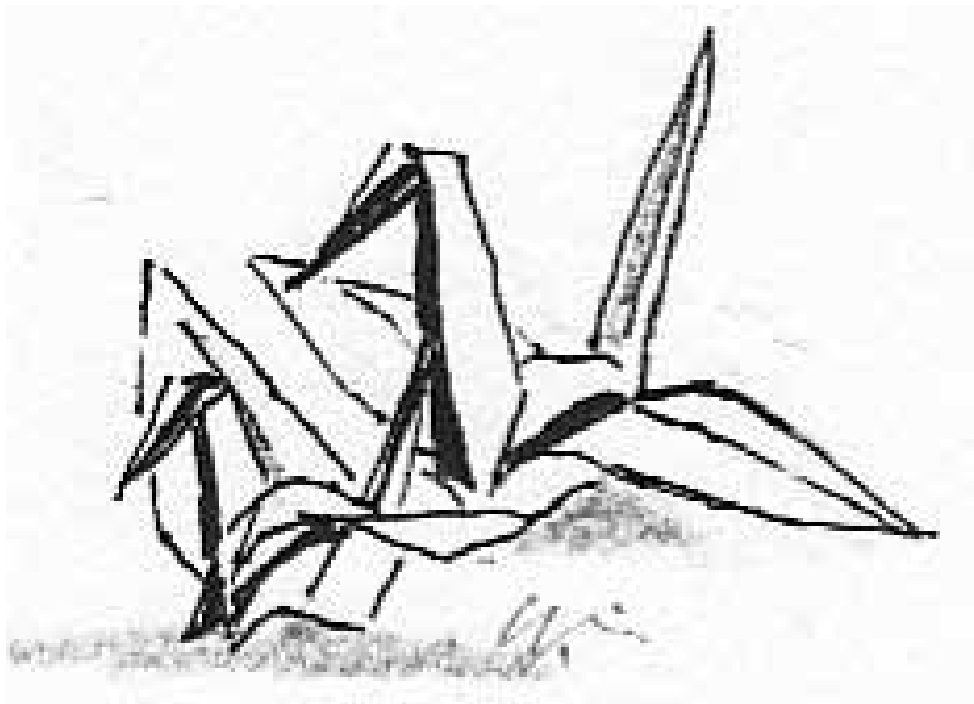


Illustration by Emi Kikuchi

## ミッシェル・ウィリアムズがマリリン・モンローを熱演 映画『My Week with Marilyn』(2011年)

米国弁護士 長野 さわか

### 【映画あらまし】

サイモン・カーティス監督の『My Week with Marilyn』は1956年にローレンス・オリヴィエが監督・製作・主演を務めた『王子と踊り子』の撮影でイギリスを訪れたマリリンと、ローレンスの第三助手コリン・クラークの短くはかない恋の物語。コリンの著書、『Prince, the Showgirl and Me』『My Week with Marilyn』回想録を基に映画化。当時のマリリンは映画撮影中、うつ状態に陥り、また演技が下手なことでローレンスとうまくいかない状況の中、コリンが彼女の心の支えになった。二人の悲恋の物語が50年の時を経て語られている。

セックスシンボルというよりは、影のある美女役のイメージが強かったミッシェルは、当初、ケイト・ハドソン、スカーレット・ジョハンソン、エイミー・アダムズを抑えてのオファーを断ったという。「マリリン・モンローは体格から性格まで自分とは違いすぎる」と思ったからだ。だが、マリリンになりきり、その振る舞いや喋り方を見事にマスターした。映画の始めは「上手くマネているな」と見ていたが、途中から本当のマリリン・モンローのような錯覚を覚えた程だ。そして、自分が作り上げた「マリリン・モンロー」という女優を演じている素顔のマリリンと、何層にも重なり合っているマリリンの内面をも迫真の演技で表現していた。

### 【ミッシェル・ウィリアムズの魅力】

アメリカのアイコンとも言えるマリリン・モンロー役に挑んだのは『ブロークバック・マウンテン』(2005年)でアカデミー助演女優賞にノミネートされ、『ブルーバレンタイン』(2010年)では主演女優賞にノミネートされた若手女優ミッシェル・ウィリアムズ。私の大好きな女優。

90年代後半から2000年代初めに人気のあった青春ドラマ『Dawson's Creek』(主演ケイティ・ホームズ(トム・クルーズの妻))でブレイクして以来、注目してきた女優だ。同ドラマは10代をターゲットにした番組であったが、恥ずかしながら青春時代をとっくに過ぎた大の大人でもハマってしまった。ミッシェルは、ちょっと影のある心に傷を負った美少女を好演。年若くして「早く大人になってしまった」役柄と自身の重なる部分も多かったようだ。

その後、インディ系映画に数多く出演。『The Station Agent』(2003年)では主演の小人の男性が密かに惹かれる図書館員。この演技が評価されて『Brokeback Mountain』(『ブロークバック・マウンテン』)(2005年)に抜擢された。同映画では、同性愛者の夫(ヒース・レジャー)に自分たち家族よりも大切な「男性」の存在を知り、苦悩する繊細な妻の役。実生活では、ヒースと婚約、一人娘が誕生したが、その後婚約解消。ご存知の通り、ヒースは2008年、映画『ダークナイト』の完成を待たずに急性薬物中毒で死亡した。ミッシェル自身もヒースの急死により、マスコミから追われる存在となっていたので、マスコミから執拗なほどの注目を浴びていたマリリン・モンローの苦悩を自分自身にも重ね合わすことができたのではなかろうか。

『Deception』(『彼が二度愛したS』)(2008年)は、退屈な毎日を送っていた会計士(ユアン・マクレガー)が、あるきっかけで秘密のセックスクラブに参加し、ミッシェル・ウィリアムズ扮する謎の美

女に恋をするお話。ミッシェルの表面的な美しさだけでなく、内面から溢れ出る彼女の魅力を再発見できる映画だ。

『Blue Valentine』（『ブルーバレンタイン』）（2010年）では、若い時の美しい思い出が指の間からこぼれ落ちるようなはかなさを体当たりで演じ、オスカー主演女優賞にノミネートされた。初々しい若さ溢れる学生時代（激しい濡れ場を含め）と生活に疲れた現時点の差をうまく演じ分けていた。女優としてもさらに飛躍したことを実感させられる作品であった。

#### 【オスカーの行方】

明日（2012年1月24日）、オスカーのノミネーションが発表となる。ミッシェル・ウィリアムズのマリリン・モンローは第69回ゴールデン・グローブ賞で主演女優賞を受賞。今年の第84回オスカーの主演女優賞もぜひ狙ってもらいたい。

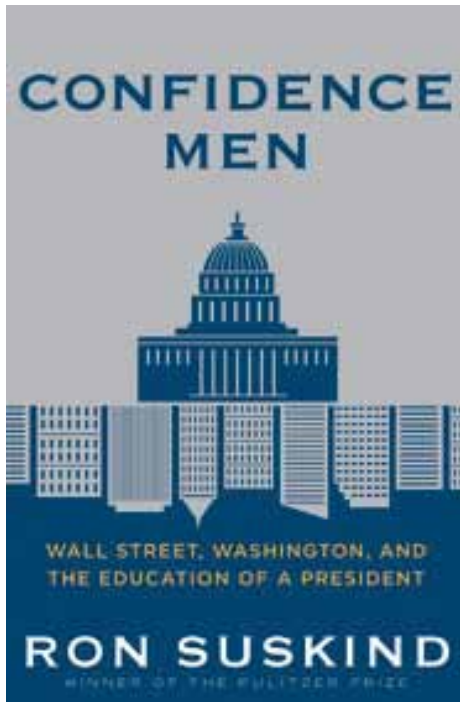
それにしても、美尻パッド入り矯正下着で、細身の彼女が見事にマリリン・モンローのボディに変身できたというのは、強制下着の効果抜群！

HAPPY VALENTINE'S DAY!

JCAW

## 今月の書評 「コンフィデンス・メン」 ロン・サスカインド

ポトマック・アソシエーツ 池原 麻里子



「コンフィデンス・メン」  
ロン・サスカインド(ハーパー)

本書の副題は『ウォール・ストリート、ワシントンと大統領の教育』。大統領候補だった2007年夏から大統領就任して中間選挙後まで、オバマがいかに金融危機に対応したかの内幕を詳細に描いている。

著者サスカインドは、ウォール・ストリート・ジャーナル記者時代にピューリッツァー賞を受賞している。ポール・オニール元財務長官の書類を基に9・11同時多発テロより前、ブッシュ政権がその発足10日目にすでにサダム・フセイン追放を焦点としていた事実を暴露した『忠誠の代償』、そしてテロ後の外交政策形成について描いた『1%ドクトリン』など彼の著作はベストセラーになった。

本作品を記すにあたって、サスカインドは200人以上の関係者にインタビューした。そこで浮かび上がってくるのはオバマが、あまり得意でない金融問題に直面し、リーダーシップを発揮できず、国民の信頼も失っていく姿である。その裏にはクリントン政権で金融規制を緩和したローレンス・サマーズ国家経済会議(NEC)委員長やティモシー・ガイトナー財務長官等が、オバマの指示を無視したり、抵抗して金融政策を牛耳ってしまう実態が明らかにされている。特に大変な自信家のサマーズに至っては、専門分野以外でも自分が正しいとの確信によって、他の貴重な意見を叩き潰してしまう。

両人が障害となって、オバマは金融業界が最悪の状態に直面していたときにリーダーシップを発揮して、金融改革を施行するチャンスを逃してしまう。例えば、「シティバンクを解体せよ」というオバマの指示は無視されてしまうのだ。

両人が障害となって、オバマは金融業界が最悪の状態に直面していたときにリーダーシップを発揮して、金融改革を施行するチャンスを逃してしまう。例えば、「シティバンクを解体せよ」というオバマの指示は無視されてしまうのだ。

またラーム・エマニュエル大統領首席補佐官は議会を熟知していることから、立法的に不可能と判断した改革はすべて潰した。短期的な視野しかないため、オバマが望んでいた大胆な改革案を阻止した。

今年2月まで大統領経済回復諮問委員会委員長を務めたポール・ボルカー元連邦準備制度理事長は、商業銀行のヘッジファンド化を避けて、デリバティブ市場の透明性を確保する必要があると主張していたが、サマーズ達に阻止されてしまう。ボルカーはオバマが自信過剰でありながら、サマーズに依存し過ぎる点に批判的だ。「オバマは頭がよいが、それだけでは不十分だ。リーダーシップとは全く別のもので、恒久的な真の決断を下すに十分なほど自分の考えを知り尽くすことである」と鋭い指摘をしている。彼はこの数十年、金融のエンジニアは大量生産し、土木技師は生み出さず、金融業界のモラルの欠如とインフラの崩壊を招いたアメリカの悲劇を嘆く。

一方、ローズ奨学金生だったりと大変に優秀な女性スタッフたちは、オバマがバスケット・ボールやゴルフなど男性と緊密な関係を結ぶが、自分たちが活用されていないと抗議するが事態は改善しない。

金融業界もヘルスケア業界も金融危機、ヘルスケア改革の過程でオバマに接し、彼がリーダーシップを発揮せず、彼の発言は実行されないという弱点を知り、そこに漬け込む。ピュー社の8月の世論調査によると、オバマが強いリーダーだと考えているのは49%に過ぎないが、そのイメージは必ずしも的外れではないのだ。

さて、サスカインドとの今年2月のインタビューで、オバマ自身、政権最初の2年を振り返り、自分がビル・クリントンやジミー・カーター同様、政策通で、テクノクラートの政府へのアプローチには優れているが、政策だけでなく、レーガンのようなシンボルとしての大統領の役割が重要だと認識したと語っている。

連邦準備制度理事長の座を狙っていたが、それが叶わなかったサマーズは政権を去った。長期的戦略を練り、施行することが不得意なエマニュエル首席補佐官も去った。新チームで、オバマは2008年大統領選挙時のように、国民に夢を与え、再選への道を歩むことができるのか。高失業率が続く厳しい現状とその信念が明確でないオバマに、国民は失望している。

(NEW LEADER 2011年11月号より転載)

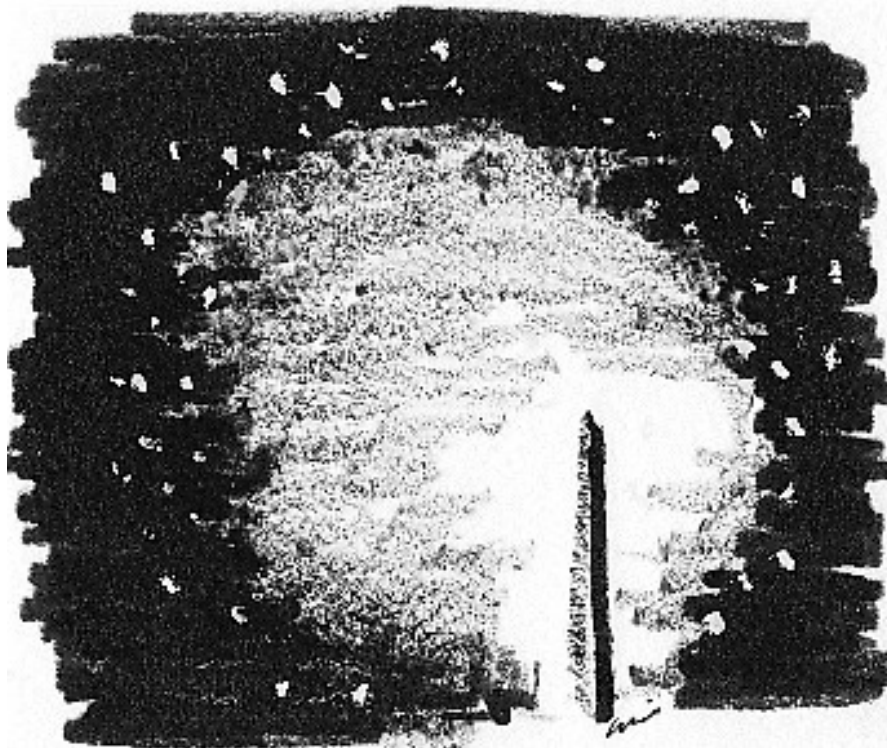


Illustration by Emi Kikuchi

## 連載小説「ワシントン・スクランブル」

## ～第一話 バレンタイン～

愛川 耀

二月になってワシントンに雪が降った。

窓の外は一面の銀世界で、樹木は綿帽子を被ったかのごとく純白に装い、朝陽を受けて煌めいている。新庄透はパジャマを着たままベッドルームの窓際に立ち、しばし戸外の美しい雪景色を堪能した。

このところ寝付けない晩が続いており、昨夜はメラトニンを二錠、ワインと共に飲み下してベッドに入ったのだが、眠ろうと力むほどに眼が冴えて、やっと浅い眠りにおちたのは明け方であった。睡眠不足のためか頭が鉛を埋め込まれたように重い。

幸い今日は日曜日なので再びベッドに潜り込んでもよいのだが、一階へ降りて朝一番のコーヒーを飲み眠気を覚ますことにする。

東亜興産がワシントン駐在員事務所所長宅に借り受けている家はベセスダの奥まった住宅街に在り、ベッドルームが四つもある二階建てだ。キッチンだけを見渡しても東京のマンションがすっぽり入るぐらい大きく、去年の秋にこちらへ単身赴任してからまだこの広さに馴れない。パーティーにでも使うのか備え付けのコーヒーメーカーは十人用で、大きなマシンでささやかに一人分のコーヒーを淹れるというのは味気無いものである。

コーヒーの香りが冷えたキッチンに少し温かみを添え、透はマグカップを手にスリッパを突っ掛けたまま裏口からテラスへ出た。痛いほどの冷気に頭が冴えてくる。

頭上には真っ青な冬空、テラスに降り積もった雪は白銀に輝いている。もう何年もスキーに行っていないことを思い出した。最後に滑ったのは何時だったろうか。妻の幸子はスキーをしないので結婚してから出掛けた憶えはなく、スキー場とはたぶん二十年近くご無沙汰しているはずだ。

透はまたもや溜息をついている自分に気づく。来月の誕生日には四十五歳になる。四捨五入すれば早くも五十、そして数年後には本当に五十歳を迎えるというわけだ。今まで歳のことなど考えたことはなかったのだが、どうも最近、気になる。あくせく働いて来て、ふと立ち止まったらもうそんな歳になっていたということが、正直言って解せない。

純白の清らかな雪景色を眺めながら苦いコーヒーを啜り、透はもう一度溜息を洩らした。

「それって、ホームシック、ってことですよ。きっと新庄さんは侘しい単身赴任でメゲているんだ。ま、酒でも飲んで元気を出しましょう」

同情と冷やかす半々の声で田辺が紹興酒をグラスに注ぎ足した。今宵集ったのはワシントンへ来てから懇意になった駐在員仲間で、毎月一回、Kストリートにある四川料理の店シチュアン・パビリオンで情報交換を兼ねた夕食会を開いている。大使館に勤務する田辺は家族を伴って赴任して



\* 愛川耀氏(ペンネーム)はJCAW会員。ブログは<http://blogs.yahoo.co.jp/aikawaakihome> 小説に登場する場所名・店名等以外はすべてフィクションです。

いるが、透を含めた他の三人は単身赴任者だ。

「単身赴任が侘しいとは聞き捨てならないな。途上国じゃあるまいしワシントンにはメシでもゴルフ場でも何でも揃っている。女房子供から解放されて晴れて自由の身、こんな楽しいことはないじゃないか」

快活な声で応じたのは単身赴任が通算十二年間にも及ぶ商社マンの篠原で透とは大学時代の同期でもある。赴任先では必ず現地妻を調達する、と豪語している男だ。

「篠原さんは単身に馴れているからそう言うけれど、初めての単身赴任ってのはキツイものがありますよね。赴任当初は新たな地での馴れない仕事に気が紛れるが、数カ月経って現地に落ち着いた頃が危ないんです。新庄さんが不眠になったってのもきっとそれだな」

いかにも辛そうな麻婆豆腐を嬉々として食べながら相沢が言い添えた。彼はメーカーに勤めており、単身赴任はデュッセルドルフに次ぎ二回目だとのことで透より幾つか若い。

最近不眠症気味であるとなつて口を滑らせたことを後悔し、透は弁明を試みた。

「いや、女房がいないのは大いに結構で、単身赴任がどうこうということでもないんだ。もともと、うちの女房は出版社の仕事が忙しくて擦れ違いみたいな生活をしていたわけだし。・・・しかし、眠れないっていうのは応えますね」

「歳だよ、歳」

篠原がペパリーシュリンプに箸を伸ばしながら断言し、皆が苦笑した。

「篠原さんみたいな元気旺盛な人がそう言う、いやに真実味がありますね」と田辺。

「人間、皆歳を取る。だからって淡々と時を過ごしていたらますます老けるだけだ。ま、新庄、先ずは若いガールフレンドでも作って青春したらどう？せつかく単身赴任しているのだから、ここは大いに羽根を伸ばさなきゃいけないよ」

いったい何処でそんなガールフレンドを見つけるのか、と相沢が半ば本気で問い質して爆笑を買い、透も一緒に笑いながら、実は篠原が吐いた、歳、という言葉に内心びくりとしたのだった。

週末にジョージタウンを訪れた透は、ディーン&デルカに立ち寄りコーヒー豆を買い足した。店に付属しているカフェは高天井で、優美な曲線を描く鉄骨の柱はヨーロッパの駅舎を想わせる。ついでにカフェラテでも飲んでから帰ろうとしたところ、カフェの中央にバレンタインデーのチョコレートが色鮮やかに陳列されているのに気づいた。

これが日本だと義理チョコだ、お返しだとかやこしいのだが、米国人秘書のスーズンによると、こちらのバレンタインは男性が女性にチョコレートや花を贈ったりする日らしい。

ふと、妻の幸子はどうしているだろうか、と思い起こす。メールの遣り取りはあるものの、ここ二週間ほどは電話をしておらず声を聴いていない。これはマズイだろうか多少反省するが、わざわざ電話するほどの理由は無いし、急用でもあれば向こうが連絡して来るに違いない。幸子の会社は夜が遅いうえ彼女は朝が苦手なので、十四時間の時差は結構不都合だ。先日雪が降った朝にでも電話を掛けて話題を提供しておけばよかった、と今になって思い付き、遅きに失した機会に苦笑した。

「I love chocolate!」

若い女性の声に愕いて振り向くと、隣にカラフルな毛糸の帽子を被った東洋人の女の子がいた。チョコレートを真剣に眺めている横顔は切れ長の瞳を濃いアイラインで引き立たせ、戸外の寒さの



ためか頬を薄っすらと紅く染めている。透き通るように白い顔肌は陶器のごとくすべらかで、皺一つない。

不躰な視線に気付いたのか、彼女はくりと首をねじ向け、咎めるかに睨んだ。見知らぬ若い女性に身竦められて透が唾然としていると、彼女は可笑しそうに吹き出した。

「チョコレート、買ってくれますか？」

「えっ？」

「日本語、わかりますよね」

いったいどういうことなのか不意を突かれて釈然としなかったが、透はまるで呪文にかけられたかのごとく、気づくと無意識にチノパンツの尻に入れた財布を探っていた。

目許が涼しげで整った顔立ちの子だ。彼女が真面目な顔付きで言い足した。

「私、お財布を持って来るのを忘れたとか、そういうことじゃないんです」

「じゃ、どういうことなんだ？」

「バレンタインってチョコをプレゼントしてもらう日でしょう？」

彼女の言うことはもっともだが、こちらには初対面の彼女にプレゼントしなければいけない理由などないはずだ。しかし裡なる疑問はさておき、純粋な、という形容詞を進呈したくなる清らかな顔に魅せられて、透は思わず彼女に尋ねた。

「で、どのチョコレートが欲しいわけ？」

「そうね、これかしら」

女の子がチョコレートの詰まった一番大きなバスケットを持ち上げてみせたので、透はさすがに面食らう。その狼狽振りに気を良くしたのか、彼女はニヤリと笑みを浮かべるとバスケットを棚に戻し、毛糸の手袋をした両手で赤い小さな箱を大事そうに摘まんだ。

「やっぱり、これにしておきます」

カフェのレジに二人で並びながら、透は狐に摘ままれたような想いだ。ひょっとしてこれが、めぐり逢い、というものだろうか、と半ば冗談半ば本気で考える。

カフェラテを飲みに来たことを思い出し、試しに女の子を誘ってみることにした。

「残念！これから約束があるんです」とつれない返事が返ってきた。

とすると、いったい俺は何なんだ。当惑しながら透がレジでカフェラテを注文しチョコレートの代金を支払うと、彼女はいかにも嬉しそうにチョコを受け取った。

「サンキューです。じゃ、これで失礼します」

ぺこりとお辞儀をすると女の子はあっという間に身を翻して尻を向け、ジーンズにロングブーツを履いた長い脚で闊歩しながらジョージタウンの雑踏に消えたのだった。

いったい何なんだ、これは・・・。

カフェの椅子に座ってラテを飲みながら透はもう一度胸の裡で繰り返す。少なくともこの奇妙な遭遇は幸子に電話をする際のネタぐらいにはなってくれるだろう、と苦笑した。

東亜興産のワシントン駐在員事務所には所長の透の他に本社から出向している安藤、それに現地採用の日本人スタッフが二人いる。その一人、川口春香がチョコらしき包みを手に透の部屋にやって来た。来月出産だとのことで大きなお腹を労わるように片手を添えている。有能なスタッフである彼女に産休を取られるのは事務所にとって痛いところだ。

手渡されたバレンタインの義理チョコに透が礼を述べると、春香が続けた。

「私の産休中にテンプで働いてもらう黒木さん、今日引き継ぎで来てもらいましたのでご紹介します」

春香の手招きで部屋に入って来た女性を見て透は愕いた。

まさしくジョージタウンでチョコレートをせがんだ女の子だったからだ。(続)



## 今月の簡単レシピ： 「変わり田作り」

フードクリエイター 木内 由紀

本年スタートのレシピです。去年はたくさんの方々に参考にして頂きとても嬉しかったです。ありがとうございました。本年も、アメリカで手に入る身近な食材で、私達日本人もアメリカの方にも喜んでいただけそうなレシピ作りを楽しみたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

お正月はみなさんどのようにお過ごしになりましたか？韓国系やその他アジア系のスーパーに足を運ぶと、お節の数種は手軽に作れました。中でも私が気に入ったのは田作り。

アメリカではどうしても不足しがちな、青い背のお魚から摂取できるDHAやEPAは、高脂血症や動脈硬化症などの薬にも使われていますし、最近では健康食品としてサプリメントもたくさん見かけますね。毎日少しずつ摂取する事が大切で、血液をサラサラにしてくれます。田作りで使う乾燥したイワシには、この栄養分が豊富に含まれているのです。

今月は、お正月に田作りで残ったイワシで常備レシピをご紹介します。

ほんのりお醤油の香りがご飯にもとっても合いますし、バターの香りでおやつ感覚にも。透明ガラス瓶に入れ、テーブルに置いておくと、うちの子供達はおやつにバリバリ食べています。暖かいご飯に添えると、頂く頃には少ししっとり感も加わり、お弁当にもニジュウマルです。

### 変わり田作り

#### 《材料》

- ・イワシ乾燥(幼稚,小ぶりのもの)::90g
- ・スライスアーモンド::30g

#### [a]

- ・砂糖(ブラウンシュガー使用)::大さじ3
- ・醤油::小さじ1
- ・バター::20g

#### 《作り方》

【1】底面積の広いフライパンを温め、イワシとスライスアーモンドを広げのせ中火でゆっくり焦げない様に乾煎りします。イワシを少し冷ましてみてポキッと折れるくらいまで煎ったら、クッキングシートなどの上に広げ冷ましておきます。

【2】材料[a]の砂糖と醤油はフライパンに入れ、中火にかけ、フライパンをゆらしながら砂糖がほとんど溶けたらバターも加え混ぜ合わせます、バターが完全に溶けてから更に混ぜながら加熱を続け、大きめの泡が全体にブツブツとしてきたら火を止め(1)



を加え手早く絡めてクッキングシートに広げのせ、出来上がり。

《ポイント》

出来上がってからクッキングシートに広げた時の状態で固まりますので、なるべく広げのせましょう。保存はしっかり乾いてから容器に入れます。

●私がみつけたこれは、韓国スーパーで購入できます。日本語で記載されていますが、韓国のもも置いてあり、通年出ていますが、時季によるのか？大きさがさまざまです。小さめを選んで下さい。

●ここではアーモンドを使っていますが、砕いたクルミやゴマなどと合わせても美味しいです。



～フードクリエイター 木内由紀 プロフィール～



日々の料理や手作りパン、スイーツのレシピなど1,000以上を、ブログ「ゆちのお料理実験室」で紹介。

簡単でおいしい内容が人気を呼び、テレビや雑誌、企業にも多数レシピを提供している。

現在アメリカ、ワシントンDC近くバージニア州にて活動中。

ブログ：<http://oryorijikken.blog48.fc2.com/>

## English Rescue by Jennifer: 「日本人が間違いやすい英語表現⑩」

ジェニファー・スワンソン

A lot of people ask me how to say, よろしく願います in English. This is a very Japanese expression, which shows the feeling Japanese people have when requesting something. American people do not have the same feeling. When we ask someone to do something, we expect to say, “Thank you!” when it’s finished. But I do understand the Japanese feeling and the need to say something at the time of requesting.

Here are some things you can say:

あけましておめでとうございます。=  
“Happy New Year! Thank you for everything LAST YEAR!”

子供の面倒を見てくれる人に=  
“Thank you for taking care of him/her/them.”

手紙やメールでお願いする時に=  
“Thank you IN ADVANCE for your help/assistance with this matter.”

新しい職場で「どうぞよろしく願います」=  
“I’m looking forward to working with you.”

一緒に勉強をする相手に=  
“I’m looking forward to studying with you.”

「〇〇さんによろしく」=  
“Please give my (best) regards to 〇〇.” (formal)  
“Please say hello to 〇〇 for me.” (casual)

Good luck and thank you for reading English Rescue! これからもよろしく願います。

Please feel free to email me anytime with questions or suggestions for future English Rescue.  
[Jeniko3@gmail.com](mailto:Jeniko3@gmail.com)(日本語でどうぞ)

.....



### ～Jennifer Swanson プロフィール～

日本にて7年在住中に、高校英語教師の経歴を持ち、日本企業でも働いた経験を生かし、現在は米国大学講師、日米協会講師、在米日本人に英語レッスンの他、米国人に日本語も教える。  
日米でのさまざまな経験を基に、多方面から楽しい英語レッスンを展開しています。

日米協会英語レッスンでは第7期生徒を募集中です。詳しくは：<http://www.us-japan.org/dc/pdf/2011/ELS%20Spring%202011%20Registration.pdf>

## 1・2月合併号 編集後記

2012年は、春のロシア大統領選挙、夏のロンドンオリンピック、秋の米大統領選挙と、世界の注目を浴びる大きな行事が目白押しですが、当地の日本人コミュニティや日米関係にとっても重要な節となる桜百周年に関連した数多くの行事が予定されている年でもあります。

ワシントン商工会では、毎月の会報を通じ、当地に住む会員の皆様に商工会の諸活動につき報告をおこなうのみならず、会員の皆様の役に立つ情報やお楽しみいただける記事の提供に努め、さらに、会員の皆様の意見交換やネットワーキングのきっかけとなる場を提供できれば、と願っております。

商工会会員が関心を持ちそうなことにつき、「これは、他の会員にも参考になるのではないか」、「自分はこう思うのだが」、といった情報やご意見があれば、是非当会報にご投稿、ご連絡頂ければ幸いです。

伊藤・為村



HAPPY VALENTINE'S DAY!